

偷盜

芥川龍之介

青空文庫

「お婆ば、いのくま猪熊のお婆ば。」

すざくあやのこうじ

朱雀綾小路つじの辻で、じみな紺の水干すいかんに揉烏帽子もみえぼしをかけた、

はたち

二十ばかりの、醜い、片目の侍が、平骨ひらぼねの扇を上げて、通りか

かりの老婆を呼びとめた。――

むし暑く夏なつがすみ霞のたなびいた空が、息をひそめたように、家

々の上をおおいかぶさつた、七月のある日ざかりである。男の足をとめた辻には、枝のまばらな、ひよろ長い葉柳はやなぎが一本、このごろはやる疫病えやみにでもかかったかと思う姿で、形かたばかりの影を地

の上に落としているが、ここにさえ、その日にかわいた葉を動かそうという風はない。まして、日の光に照りつけられた大路には、あまりの暑さにめげたせいか、人通りも今はひとしきりとだえて、たださつき通った牛車ぎつしやのわだちが長々とうねっているばかり、その車の輪にひかれた、小さな蛇ながむしも、切れ口の肉を青ませながら、始めは尾をびくびくやっていたが、いつか脂あぶらぎつた腹を上へ向けて、もう鱗うろこ一つ動かさないようになってしまった。どこもかしこも、炎天のほこりを浴びたこの町の辻で、わずかに一滴の湿りを点じたものがあるとすれば、それはこの蛇ながむしの切れ口から出た、なまぐさい腐れ水ばかりであろう。

「おばば。」

「……」

老婆は、あわただしくふり返つた。見ると、年は六十ばかりであらう。垢あかじみた檜皮色ひわだいろの帷子かたびらに、黄ばんだ髪の毛をたらし、尻しりの切れた藁草履わらぞうりをひきずりながら、長い蛙かえる股またの杖つえをついた、目の丸い、口の大きな、どこか蟄ひきの顔を思わせる、卑しげな女である。

「おや、太郎さんか。」

日の光にむせるような声で、こう言うと、老婆は、杖をひきずりながら、二足三足あとへ帰つて、まず口を切る前に、上くちびるをべろりとなめて見せた。

「何か用でもおありか。」

「いや、別に用じゃない。」

片目は、うすいあばたのある顔に、しいて作つたらしい微笑をうかべながら、どこか無理のある声で、快活にこう言つた。

「ただ、沙しやきん金がこのごろは、どこにいるかと思つてな。」

「用のあるは、いつも娘ばかりさね。鳶とびが鷹たかを生んだおかげには。」

猪熊いのくまのぼばは、いやみらしく、くちびるをそらせながら、にやついた。

「用と言うほどの用じゃないが、今夜の手はずも、まだ聞かないからな。」

「なに、手はずに変わりがあるものかね。集まるのは羅生門らしやうもん、

刻限は亥の 上刻——みんな昔から、きまつているとおりさ。」

老婆は、こう言つて、わるがしこそうに、じろじろ、左右をみまわしたが、人通りのないのに安心したのかまた、厚いくちびるをちよいとなめて、

「家内の様子は、たいてい娘が探つて来たそうだよ。それも、侍たちの中には、手のきくやつがいるまいという事さ。詳しい話は、今夜娘がするだろうがね。」

これを聞くと、太郎と言われた男は、日をよけた黄紙きがみの扇の下で、あざけるように、口をゆがめた。

「じゃ沙金しゃきんはまた、たれかあすこの侍とでも、懇意になつたのだな。」

「なに、やっぱり販婦ひさぎめか何かになつて、行つたらしいよ。」

「なんになつて行つたつて、あいつの事だ。当てになるものか。」
「お前さんは、相変わらうたぐり深いね。だから、娘にきらわれるのさ。やきもちにも、ほどがあるよ。」

老婆は、鼻の先で笑いながら、杖つえを上げて、道ながぼたの蛇むしの死骸しがいを突つついた。いつのまにかたかつていた青蠅あおばえが、むらむらと立つたかと思うと、また元のように止まつてしまう。

「そんな事じゃ、しつかりしないと、次郎さんに取りられてしまうよ。取られてもいいが、どうせそうなれば、ただじやすまないからね。おじいさんでさえ、それじや時々、目の色を変えるんだから、お前さんならなおさらだろうじやないか。」

「わかつているわな。」

相手は、顔をしかめながら、いまいましそうに、柳の根へつばを吐いた。

「それがなかなか、わからないんだよ。今でこそお前さんだつて、そうやって、すましているが、娘とおじいさんとの仲をかぎつけた時には、まるで、気がふれたようだったじゃないか。おじいさんだつて、そうさ、あれで、もう少し気が強かろうものなら、すぐにお前さんと刃物はものざんまい三昧だわね。」

「そりやもう一年前まえの事だ。」

「何年前まえでも、同じ事だよ。一度した事は、三度するつて言うじやないか。三度だけなら、まだいいほうさ。わたしなんぞは、こ

の年まで、同じばかりを、何度したか、わかりやしないよ。」

こう言つて、老婆は、まばらな齒を出して、笑つた。

「冗談じゃない。——それより、今夜の相手は、曲がりなりにも、とうほうがん藤判官だ、手くぼりはもうついたのか。」

太郎は、日にやけた顔に、いらだたしい色を浮かべながら、話頭を転じた。おりから、雲の峰が一つ、太陽の道に当たつたのであろう。あたりがゆうぜん然と、暗くなつた。その中に、ただ、ながむし蛇の死骸しかいだけが、前よりもいっそう腹の脂あぶらを、ぎらつかせているのが見える。

「なんの、藤判官だといつて、高が青侍の四人や五人、わたしだつて、昔とつたきねづかさ。」

「ふん、おばばは、えらい勢いだな。そうして、こっちの人数にんずは？」

「いつものとおり、男が二十三人。それにわたしと娘だけさ。阿あ濃こぎは、あのからだだから、朱雀門すざくもんに待っていて、もらう事にしようよ。」

「そう言えば、阿濃も、かれこれ臨月だったな。」

太郎はまた、あざけるように口をゆがめた。それとほとんど同時に、雲の影が消えて、往来はたちまち、元のように、目が痛むほど、明るくなる。——猪熊いのくまのばばも、腰をそらせて、ひとしきり東鴉あずまがらすのような笑い声を立てた。

「あの阿呆あほうをね。たれがまあ手をつけたんだか——もつとも、阿あ

濃こぎは次郎さんに、執しゅうしん心しんだったが、まさかあの人でもなからうよ。」

「親のせんぎはともかく、あのからだじや何かにつけて不便だらう。」

「そりや、どうにでもしかたはあるのだけれど、あれが不承知なのだから、困るわね。おかげで、仲間の者さへ沙汰さたをするのも、わたし一人という始末しまさ。真木島まきのしまの十郎、関山せきやまの平六へいろく、高市たけちの多囊丸たじようまると、まだこれから、三軒まわらなくつちや——おや、そう言えば、油を売っているうちに、もうかれこれ未ひつじになる。お前さんも、もうわたしのおしやべりには、聞き飽きたらう。」

蛙かえる股またの杖つえは、こういふことばと共に動いた。

「が、沙金しやきんは？」

この時、太郎のくちびるは、目に見えぬほど、かすかにひきつった。が、老婆は、これに気がつかなかつたらしい。

「おおかた、きようあたりは、猪熊のわたしの家うちで、昼寝でもしているだろうよ。きのうまでは、家うちにいなかったがね。」

片目は、じつと老婆を見た。そうして、それから、静かな声で、「じゃ、いずれまた、日が暮れてから、会おう。」

「あいさ。それまでは、お前さんも、ゆつくり昼寝でもする事だよ。」

猪熊いのくまのばばは、口達者に答えながら、杖つえをひいて、歩きだした。綾小路あやのこうじを東へ、猿さるのような帷子かたびらす姿がたが、藁草履わらぞうりの尻しりに

ほこりをあげて、日ざしにも恐れず、歩いてゆく。——それを見送った侍は、汗のにじんだ額に、険しい色を動かしながら、もう一度、柳の根につばを吐くと、それからおもむろに、くびすをめぐらした。

二人の別れたあとには、例の蛇ながむしの死骸しがいにたかった青蠅あおばえが、相変わらず日の光の中に、かすかな羽音を伝えながら、立つかと思うと、止まっている。……

二

猪熊のばばは、黄ばんだ髪の根に、じつとりと汗をにじませな

がら、足にかかる夏のほこりも払わずに、杖をつきつき歩いてゆく。――

通い慣れた道ではあるが、自分が若かつた昔にくらべれば、どこもかしこも、うそのような変わり方である。自分が、まだ台だいば盤んどころ所の婢女みずしをしていたころの事を思えば、――いや、思いがけない身分ちがいの男に、いどまれて、とうとう沙金しゃきんを生んだころの事を思えば、今の都は、名ばかりで、そのころのおもかげはほとんどない。昔は、牛車ぎつしやの行きかいのしげかつた道も、今はいたずらにあざみの花が、さびしく日だまりに、咲いているばかり、倒れかかつた板垣いたがきの中には、無花果いちじゆくが青い実をつけて、人を恐れない鴉からすの群れは、昼も水のない池につどっている。そう

して、自分もいつか、髪が白しらみしわがよつて、ついには腰のまがるような、老いの身になつてしまった。都も昔の都でなければ、自分も昔の自分でない。

その上、貌かたちも変われば、心も変わった。始めて娘と今の夫との關係を知つた時、自分は、泣いて騒いだ覚えがある。が、こうなつて見れば、それも、当たりまえの事としか思われぬ。盗みをする事も、人を殺す事も、慣れれば、家業と同じである。言わば京の大路小路おおじこうじに、雑草がはえたように、自分の心も、もうすさんだ事を、苦にしないほど、すさんでしまった。が、一方から見ればまた、すべてが変わつたようであらうで、変わつていない。娘の今している事と、自分の昔した事とは、存外似よつたところがある。あ

の太郎と次郎とにしても、やはり今の夫の若かったところと、やる事にたいした変わりはない。こうして人間は、いつまでも同じ事を繰り返してゆくのであろう。そう思えば、都も昔の都なら、自分も昔の自分である。……

猪熊いのくまのぼばの心の中には、こういう考えが、漠然ばくぜんとながら、

浮かんで来た。そのさびしい心もちに、つまされたのであろう、丸い目がやさしくなつて、蟄ひきのような顔の肉が、いつのまにか、ゆるんで来る。——と、また急に、老婆は、生き生きと、しわだらけの顔をにやつかせて、蛙かえるまた股つえの杖のはこびを、前よりも急がせ始めた。

それも、そのはずである。四五間先に、道とすすき原とを（こ

れも、元はたれかの広庭であつたのかもしれない。一隔てる、く
 ずれかかつた築土ついでじがあつて、その中に、盛りをすぎた合歡ねむの木が
 二三本、こけの色の日に焼けた瓦かわらの上に、ほほけた、赤い花をた
 らしている。それを空そらに、枯れ竹の柱を四すみへ立てて、古むし
 ろの壁を下げた、怪しげな小屋が一つ、しよんぼりとかけてある。
 ——場所と言ひ、様子と言ひ、中には、こじきでも住んでいるら
 しい。

別して、老婆の目をひいたのは、その小屋の前に、腕を組んで
 たたずんだ、十七八の若侍で、これは、朽ち葉色の水干くろざやに黒鞆くろざや
 の太刀たちを横たえたのが、どういふわけか、しさいらしく、小屋の
 中をのぞいている。そのういふしい眉まゆのあたりから、まだ子供

らしきのぬけない頬ほおのやつれが、一目で老婆に、そのたれという事を知らせてくれた。

「何をしているのだえ。次郎さん。」

猪熊いのくまのぼばは、そのそばへ歩みよると、蛙かえる股またの杖つえを止め

て、あごをしやくりながら、呼びかけた。

相手は、驚いて、ふり返ったが、つくも髪ひきの、墓つらの面の、厚いくちびるをなめる舌を見ると、白い齒を見せて微笑しながら、黙って、小屋の中を指さした。

小屋の中には、破れ畳を一枚、じかに地面へ敷いた上に、四十格がっこう好がっこうの小柄な女が、石を枕まくらにして、横になっている。それも、肌はだをおおうものは、腰のあたりにかけてある、麻かざみの汗衫一つぎり

で、ほとんど裸と変わりが無い。見ると、その胸や腹は、指で押しても、血膿ちゆうみにまじった、水がどろりと流れそうに、黄いろくなめらかに、むくんでいる。ことに、むしろの裂け目から、天日てんぴのさしこんだ所で見ると、わきの下や首のつけ根に、ちようど腐った杏あんずのような、どす黒い斑まだらがあつて、そこからなんとも言いようのない、異様な臭気が、もれるらしい。

枕もとには、縁の欠けた土器かわらけがたつた一つ（底に飯粒がへばりついているところを見ると、元は粥かゆでも入れたものであろう。）捨てたように置いてあつて、たれがしたいはずらか、その中に五つ六つ、泥どろだらけの石ころが行儀よく積んである。しかも、そのまん中に、花も葉もひからびた、合歡ねむを一枝立てたのは、おおか

た高^{たかつき} 坏^{くわい}へ添^そえる色紙^{しきし}の、心^{こころ}葉^はをまねたものであろう。

それを見ると、気丈^{いきぢょう}な猪^{いの}熊^{くま}のばばも、さすがに顔^{かほ}をしかめて、あとへさがった。そうして、その刹^{せつ}那^なに、突然^{とつぜん}さつきの蛇^なの死^{むし}骸^{しがい}を思い浮^うかべた。

「なんだえ。これは。疫^え病^{やみ}にかかっている人^{ひと}じゃないか。」

「そうさ。とてもいけないというので、どこかこの近^{うち}所^{ところ}の家^{いえ}で、捨てたのだろう。これじゃ、どこでも持^もてあつかうよ。」

次郎^{じらう}はまた、白^{しろ}い歯^はを見^みせて、微^こ笑^{わら}した。

「それを、お前^{まへ}さんはまた、なんだって、見てなんぞいるのさ。」

「なに、今^{いま}ここを通^{とほ}りかかったら、野^のら犬^{いぬ}が二^に三^{さん}匹^{びつ}、い^えい餌^じ食^{じき}を見^みつけた気^きで、食^くいそうにしていたから、石^{いし}をぶつけて、追^おい払^{はら}

つてやったところさ。わたしが来なかつたら、今ごろはもう、腕の一つも食われてしまったかもしれない。」

老婆は、蛙かえるまた股つえの杖にあごをのせて、もう一度しみじみ、女

のからだを見た。さつき、犬が食いかかったというのは、これであらう。——破れ畳の上から、往来の砂の中へ、斜めにのぼした

二の腕には、水気すいきを持った、土け色の皮膚に、鋭い齒の跡が三つ

四つよ、紫がかつて残っている。が、女は、じつと目をつぶつたな

り、息さえ通かよっているかどうかわからない。老婆は、再び、はげしい嫌悪けんおの感おもてに、面を打たれるような心もちがした。

「いったい、生きていますのかえ。それとも、死んでいるのかえ。」

「どうだかね。」

「気らくだよ、この人は。死んだものなら、犬が食ったって、いいじゃないか。」

老婆は、こう言うと、
蛙かえるまた股つえの杖をのべて、遠くから、ぐいと女の頭を突いてみた。頭はまくらの石をはずれて、砂に髪をひきながら、たわいなく畳の上へぐたりとなる。が、病人は、依然として、目をつぶったまま、顔の筋肉一つ動かさない。

「そんな事をしたって、だめだよ。さっきなんぞは、犬に食いつかれてさえ、やっぱりじつとしていたんだから。」

「それじゃ、死んでいるのさ。」

次郎は、三たび白い歯を見せて、笑った。

「死んでいたって、犬に食わせるのは、ひどいやね。」

「何がひどいものかね。死んでしまえば、犬に食われたって、痛くはなしさ。」

老婆は、杖の上でのび上がりながら、ぎよろり目を大きくして、あざわらうように、こう言った。

「死ななくったって、ひくひくしているよりは、いつそ一思いに、のど笛でも犬に食いつかれたほうが、ましかもしれないわね。どうせこれじゃ、生きていたって、長い事はあるやせずさ。」

「だって、人間が犬に食われるのを、黙って見てもいられないじゃないか。」

すると、猪熊いのくまのばばは、上くちびるをべろりとやって、ふてぶてしく空うそぶいた。

「そのくせ、人間が人間を殺すのは、お互いに平気で、見ていないか。」

「そう言えば、そうさ。」

次郎は、ちよいと鬢びんをかいて、四たび白い歯を見せながら、微笑した。そうして、やさしく老婆の顔をながめながら、

「どこへ行くのだい、おばばは。」と問いかけた。

「真木島まきのしまの十郎と、高市たけちの多襄丸たじょうまると、——ああ、そうだ。関せ

山きやまの平六へいろくへは、お前さんに、言づけを頼もうかね。」

こう言ううちに、猪熊いのくまのばばは、杖つえにすがって、もう二足三足歩いている。

「ああ、行ってもいい。」

次郎もようやく、病人の小屋をあとにして、老婆と肩を並べながら、ぶらぶら炎天の往来を歩きだした。

「あんなものを見たんで、すっかり気色きしよくがわるくなつてしまつたよ。」

老婆は、大おおぎよう仰うやうに顔をしかめながら、

「——ええと、平六の家は、お前さんうちも知つているだろう。これをまつすぐに行つて、立本寺りゆうほんじの門を左へ切れると、藤判官とうぼうがんの屋敷がある。あの一町ばかり先さ。ついでだから、屋敷のまわりでもまわつて、今夜の下見をしておおきよ。」

「なにわたしも、始めからそのつもりで、こつちへ出て来たのさ。」

「そうかえ、それはお前さんにしては、気がきいたね。お前さんのにいさんの御面相じや、一つ間違うと、向こうにけどられそう
で、下見に行つても、もらえないが、お前さんなら、大丈夫だよ
」。

「かわいそうに、兄きもおばばの口にかかつちや、かなわないね
」。

「なに、わたしなんぞはいちばん、あの人の事をよく言っている
ほうさ。おじいさんなんぞと来たら、お前さんにも話せないよう
な事を、言っているわね。」

「それは、あの事があるからさ。」

「あつたつて、お前さんの悪口は、言わないじゃないか。」

「じゃおおかた、わたしは子供扱いにされているんだらう。」

二人は、こんな閑談をかわしながら、狭い往来をぶらぶら歩いて行つた。歩くごとに、京の町の荒廢は、いよいよ、まのあたりに開けて来る。家と家との間に、草いきれを立てている蓬よもぎ原、そのところどころに続いている古築土ふるつじ、それから、昔のまま、わずかに残っている松や柳——どれを見ても、かすかに漂う死人しびとのにおいと共に、滅びてゆくこの大きな町を、思わせないものはない。途中では、ただ一人、手に足駄あしだをはいている、いざりのこじきに行きちがつた。——

「だが、次郎さん、お気をつけよ。」

猪熊いのくまのぼばは、ふと太郎の顔を思い浮かべたので、ひとり苦

笑を浮かべながら、こう言った。

「娘の事じゃ、ずいぶんにいさんも、夢中になりかねないからね。」

が、これは、次郎の心に、思ったよりも大きな影響を与えたらしい。彼は、ひいでた眉まゆの間を、にわかまゆに曇らせながら、不快らしく目を伏せた。

「そりやわたしも、気をつけている。」

「気をつけていてもさ。」

老婆は、いささか、相手の感情の、この急激な変化に驚きながら、例のごとくくちびるをなめなめ、つぶやいた。

「気をつけていてもだわね。」

「しかし、兄きの思わくは兄きの思わくで、わたしには、どうにもできないじやないか。」

「そう言えば、実みもふたもなくなくなるがさ。実はわたしは、きのう娘に会ったのだよ。すると、きょう未ひつじの下刻げこくに、お前さんと寺の門の前で、会う事になっていると言うじやないか。それで、お前さんのいさんには半月近くも、顔は合わせないようになっているとね、太郎さんがこんな事を知ってごらん。また、お前さん、一ひともんちやくともんちやく悶もん着ちやくだろう。」

次郎は、老婆のびび々として説くことばをさえぎるように、黙つて、いらだたく何度もうなずいた。が、猪熊いのくまのばばは、容易に口を閉ざしそうなけしきもない。

「ぎつき、向こうの辻つじで、太郎さんに会った時にも、わたしはよくそう言つて来たけれどね、そうなりや、わたしたちの仲間だもの、すぐに刃物はもの三昧さんまいだろうじやないか。万一、その時のはずみで、娘にけがでもあつたら、とわたしは、ただ、それが心配ななさ。娘は、なにしろあのと通りの気質だし、太郎さんにしても、いってつじん一徹人だから、わたしは、お前さんによく頼んでおこうと思つてね。お前さんは、死人しびとが犬に食われるのさえ、見ていられないほど、やさしいんだから。」

こう言つて、老婆は、いつか自分にも起こつて来た不安を、書いて消そうとするように、わざとしわがれた声で、笑つて見せた。が、次郎は依然として、顔を暗くしながら、何か物思いにふける

ように、目を伏せて歩いてゐる。……

「おおごと大事にならなければいいが。」

いのくま猪熊のばばは、かえるまた蛙股つえの杖を早めながら、この時始めて心

の底で、しみじみこう、祈つたのである。

かれこれその時分の事である。すわえ楚の先ながむししがいに蛇の死骸をひっかけた、

町の子供が三四人、病人の小屋の外を通りかかると、中でもいた

ずらな一人が、遠くから及び腰になって、その蛇ながむしを女の顔の上へ

ほうり上げた。あぶら青く脂の浮いた腹がぺたり、女の頬ほおに落ちて、そ

れから、腐れ水にぬれた尾が、ずるずるあごの下へたれる——と

思うと、子供たちは、一度にわつとわめきながら、おびえたよう

に、四方へ散つた。

今まで死んだようになっていた女が、その時急に、黄いろくた
 るんだまぶたをあけて、腐つた卵の白味のような目を、どんより
 空そらに据すえながら、砂まぶれの指を一つびくりとやると、声とも息
 ともわからないものが、干割れたくちびるの奥のほうから、かす
 かにもれて来たからである。

三

猪いのくま熊のばばに別れた太郎は、時々扇で風を入れながら、日陰
 も選ばず、朱すじく雀の大路おおじを北へ、進まない歩みをはこんだ。――

日中の往来は、人通りもきわめて少ない。栗毛くりげの馬に平文ひらもんの鞍くらを置いてまたがった武士が一人、鎧よろい櫃びつを荷なつた調度掛ちようどがけを従えながら、綾あや藪い笠がさに日をよけて、悠々ゆうゆうと通つたあとには、ただ、せわしない燕つばくらが、白い腹をひらめかせて、時々、往来の砂をかすめるばかり、板葺いたぶき、檜皮葺ひわだぶきの屋根の向こうに、むらがつているひでり雲ぐもも、さつきから、凝然と、金銀銅鉄を熔とかしたまま、小ゆるぎをするけしきはない。まして、両側に建て続いた家々は、いずれもしんと静まり返つて、その板いた葺じや蒲かます簾だれの後ろでは、町じゆうの人がことごとく、死に絶えてしまつたかとさえ疑われる。——

猪熊いのくまのばばの言つたように、沙金しやきんを次郎に奪われるという

恐れは、ようやく目の前に迫つて来た。あの女が、——現在養父にさえ、身を任せたあの女が、あばたのある、片目の、醜いおれを、日にこそ焼けているが目鼻立ちの整つた、若い弟に見かえるのは、もとよりなんの不思議もない。おれは、ただ、次郎が、——子供の時から、おれを慕つてくれたあの次郎が、おれの心もちを察してくれて、よしや沙金のほうから手を出してもその誘惑に乗らないだけの、慎みを持つてくれる事と、いちずに信じ切つていた。が、今になって考えれば、それは、弟を買いかぶつた、虫のいい量りょうけん見けんに過ぎなかつた。いや、弟を見上げすぎたというよりも、沙金のみだらな媚こびのたくみを、見下げすぎた誤りだつ

た。ひとり次郎ばかりではない。あの女のまなざし一つで、身を滅ぼした男の数は、この炎天にひるがえる燕つばくらかずの数よりも、たくさんある。現にこう言うおれでさえ、ただ一度、あの女を見たばかりで、とうとう今のようになり、身をおとした。……

すると四し条坊門じょうぼうもんの辻つじを、南へやる赤糸毛あかいとげの女車おんなぐるまが、静かに太郎の行く手を通りすぎる。車の中の人は見えないが、紅べにの裾濃すそごに染めた、すずしの下簾したすだれが、町すじの荒涼としているだけに、ひときわ目に立ってなまめかしい。それにつき添った牛飼いの童わらべと雑色ぞうしきとは、うさんらしく太郎のほうへ目をやったが、牛だけは、角つのをたれて、漆のように黒い背を鷹揚おうようにうねらした

がら、わき見もせず、のっそりと歩いてゆく。しかしとりとめのない考えに沈んでゐる太郎には、車の金具の、まばゆく日に光つたのが、わずかに目にはいっただけである。

彼は、しばらく足をとめて、車を通りこさせてから、また片目を地に伏せて、黙々と歩きはじめた。――

（おれが右の獄ひとやの放ほうめん免をしていた時の事を思えば、今では、遠い昔のような、心もちがする。あの時のおれと今のおれとを比べれば、おれ自身にさえ、同じ人間のような気はしない。あのころのおれは、三宝を敬う事も忘れなければ、王法にしたがう事も怠らなかつた。それが、今では、盗みもする。時によつては、火つ

けもする。人を殺した事も、二度や三度ではない。ああ、昔のおれは——仲間の放免といっしょになつて、いつもの七半しちはんを打ちながら、笑い興じていた、あの昔のおれは、今のおれの目から見ると、どのくらいしあわせだったかわからない。

考えれば、まだきのうのように思われるが、実はもう一年前まえになつた。——あの女が、盗みの咎とがで、検非違使けびいしの手から、右の獄ひとやへ送られる。おれがそれと、ふとした事から、牢格子ろうごうしを隔てて、話し合うような仲になる。それから、その話が、だんだんたび重なつて、いつか互いに身の上の事まで、打ち明け始める。とうとう、しまいには、猪熊いのくまのばばや同類の盗人が、牢ろうを破つてあの女を救い出すのを、見ないふりをして、通してやった。

その晩から、おれは何度となく、猪熊のばばの家へ出はいりをした。沙金しやきんは、おれの行く時刻ゆを見はからつて、あの半蔀はじとみの間から、雀色すずめいろどき時の往来をのぞいている。そうしておれの姿が見えると、鼠鳴ねずみきをして、はいれと言う。家の中には、下衆げすおん女の阿濃あこぎのほかにも、たれもない。やがて、蔀しとみをおろす。結び燈台へ火をつける。そうして、あの何畳かの畳の上に、折敷おしきや高た坏かつきを、所狭く置きならべて、二人ぎりの小酒盛こざかもりをする。そのあげくが、笑ったり、泣いたり、けんかをしたり、仲直りをしたり——言わば、世間並みの恋人どうしが、するような事をして、いつでも夜を明かした。

日の暮れに来て、夜よのひき明け方に帰る。——あれが、それで

も一月ひとつきは続いたろう。そのうちに、おれには沙金が猪熊のぼばのつれ子である事、今では二十何人かの盗人の頭かしらになつて、時々らくちゆう洛中をさわがせている事、そうしてまた、日ごろは容色を売つて、傀儡くぐつ同様な暮らしをしている事——そういう事が、だんだんわかつて来た。が、それは、かえつてあの女に、双紙の中の人間めいた、不思議な円光をかけるばかりで、少しも卑しいなどという気は起こさせない。無論、あの女は、時々おれに、いつそ仲間へはいれと言う。が、おれはいつも、承知しない。すると、あの女は、おれの事を臆おくびよう病だと言つて、ばかにする。おれはよくそれで、腹を立てた。……)

「はい、はい」と馬をしかる声がする。太郎は、あわてて、道をよけた。

米俵を二俵ずつ、左右へ積んだ馬をひいて、汗衫かぎみ一つの下衆げすが、三条坊門の辻つじを曲がりながら、汗もふかずに、炎天おおじの大路おおじを南へ下つて来る。その馬の影が、黒く地面に焼きついた上を、燕つばくらが一羽、ひらり羽根を光らせて、すじかいに、空そらへ舞い上がった。と思うと、それがまた礫つぶてを投げるように、落として来て、太郎の鼻の先を一文字に、向こうの板いたびさし 庇ひさしの下へはいる。

太郎は、歩きながら、思い出したように、はたはたと、黄紙きがみの扇を使った。――

(そういう月日が、続くともなく続くうちに、おれは、偶然あの女と養父との關係に、氣がついた。もつともおれ一人が、沙金しやきんを自由にする男でないという事も、知っていなかつたわけではない。沙金自身さえ、關係した公卿くげの名や法師の名を、何度も自慢らしくおれに話した事がある。が、おれはこう思った。あの女の肌はだは、おおぜいの男を知っているかもしれない。けれども、あの女の心は、おれだけが占有している。そうだ、女の操みさおは、からだにはない。——おれは、こう信じて、おれの嫉妬しつとをおさえていた。もちろんこれも、あの女から、知らず知らずおれが教わつた、考え方にすぎないかもしれない。が、ともかくもそう思うと、おれの苦しい心はいくぶんちやくか楽らくになつた。しかし、あの女と養父との

関係は、それとちがう。

おれは、それを感じいた時に、なんとも言えず、不快だった。そういう事をする親子なら、殺して飽きたらない。それを黙って見る実の母の、猪熊いのくまのばばもまた、畜生より、無残なやつだ。こう思ったおれは、あの酔いどれのおやじの顔を見るたびに、何度太刀たちへ手をかけたか、わからない。が、沙金はそのたびに、おれの前で、ことさら、手ひどく養父をばかにした。そうしてその見え透いた手くだがまた、不思議におれの心を鈍らせた。「わたしはおとうさんがいやでいやでしかたがないんです」と言われれば、養父をにくむ気にはなっても、沙金をにくむ気には、どうしてもなれない。そこで、おれと養父とは、きょうがきょうまで、

互いににらみ合いながら、何事もなくすぎて来た。もしあのおじじにもう少し、勇気があつたなら、——いや、おれにもう少し、勇気があつたなら、おれたちはどうの昔、どちらか死んでいた事であろう。……)

頭を上げると、太郎はいつか二条を折れて、耳みもと敏川がわにまたがっている、小さい橋にかかっていた。水のかれた川は、細いながらも、焼き太刀やだちのように、日を反射して、絶えてはつづく葉柳はやなぎと家々との間に、かすかなせせらぎの音を立てている。その川のはるか下に、黒いものが二つ三つ、鶉うの鳥かと思うように、流れの光を乱しているのは、おおかた町の子供たちが、水でも浴びて

いるのであろう。

太郎の心には、一瞬の間、幼かった昔の記憶が、——弟といつしよに、五条の橋の下で、鮠はえを釣つった昔の記憶が、この炎天に通う微風のように、かなしく、なつかしく、返つて来た。が、彼も弟も、今は昔の彼らではない。

太郎は、橋を渡りながら、うすいあばたのある顔に、また険しい色をひらめかせた。——

(すると、突然ある日、そのころ筑後ちくごの前司ぜんじの小舎人ことねりになつてた弟が、盗人の疑いをかけられて、左の獄ひとやへ入れられたという知らせが来た。放免ほうめんをしているおれには、獄中の苦しさが、たれ

よりもよく、わかっている。おれは、まだ筋骨のかたまらない弟
 の身の上を、自分の事のように、心配した。そこで、沙金しやきんに相
 談すると、あの女はさもわけがなさそうに、「牢ろうを破ればいいじ
 やないの」と言う。かたわらにいた猪熊いのくまのばばも、しきりにそ
 れをすすめてくれる。おれは、とうとう覚悟をきめて、沙金とい
 つしよに、五六人の盗人を語り集めた。そうして、その夜のうち
 に、獄ひとやをさわがして、難なく弟を救い出した。その時、受けた傷
 の跡は、今でもおれの胸に残っている。が、それよりも忘れられ
 ないのは、おれがその時始めて、放免ほうめんの一人を切り殺した事
 あつた。あの男の鋭い叫び声と、それから、あの血のにおいとは、
 いまだにおれの記憶を離れない。こう言う今でも、おれはそれを、

この蒸し暑い空気の中に、感じるような心もちがする。

その翌日から、おれと弟とは、猪熊の沙金の家で、人目を忍ぶ身になった。一度罪を犯したからは、正直に暮らすのも、あぶない世渡りをしてゆくのも、けびいし検非違使の目には、変わりがない。どうせ死ぬくらいなら、一日も長く生きていよう。そう思ったおれは、とうとう沙金の言うなりになって、弟といっしょに盗人の仲間入りをした。それからのおれは、火もつける。人も殺す。悪事という悪事で、なに一つしなかったものはない。もちろん、それも始めは、いやいやした。が、してみると、意外にぞうき造作がない。おれはいつのまにか、悪事を働くのが、人間の自然かもしれないと思いだした。(……)

太郎は、半ば無意識に辻をまがった。辻には、石でまわりを積んだ一囲いの土饅頭どまんじゅうがあつて、その上に石塔婆せきとうばが二本、並んで、午後の日にかつと、照りつけられている。その根元にはまた、何匹かのとかげが、煤すすのように黒いからだを、気味悪くへばりつかせていたが、太郎の足音に驚いたのであろう、彼の影の落ちるよりも早く、一度にぎわめきながら、四方へ散った。が、太郎は、それに目をやるけしきもない。――

「おれは、悪事をつむに従つて、ますます沙金しゃきんに愛着あいじやくを感じて来た。人を殺すのも、盗みをするのも、みんなあの女ゆえである。――現に牢ろうを破つたのさえ、次郎を助けようと思うほかに、

一人の弟を見殺しにすると、沙金にわらわれるのを、おそれたからであつた。——そう思うと、なおさらおれは、何に換えても、あの女を失いたくない。

その沙金を、おれは今、肉身の弟に奪われようとしている。おれが命を賭^かけて助けてやった、あの次郎に奪われようとしている。奪われようとしているのか、あるいは、もう奪われているのか、それさえも、はっきりはわからない。沙^{しやきん}金の心を疑わなかつたおれは、あの女がほかの男をひっぱりこむのも、よくない仕事の方便として、許していた。それから、養父との関係も、あのおじじが親の威光で、何も知らないうちに、誘惑したと思えば、目をつぶって、すごせない事はない。が、次郎との仲は、別である。

おれと弟とは、氣だてが変わっているようで、実は見かけほど、変わっていない。もつとも顔かたちは、七八年前の痘瘡まえもがさが、おれには重く、弟には軽かったので、次郎は、生まれついた眉目みめをそのままに、うつくしい男になったが、おれはそのために片目つぶれた、生まれもつかない不具になった。その醜い、片目のおれが、今まで沙金の心を捕えていたとすれば、（これも、おれのうぬぼれだろうか。）それはおれの魂の力に相違ない。そうして、その魂は、同じ親から生まれた弟も、おれに変わりなく持っている。しかも、弟は、たれの目にもおれよりはうつくしい。そういう次郎に、沙金が心をひかれるのは、もとより理の当然である。その上また、次郎のほうでも、おれにひきくらべて考えれば、到底あ

の女の誘惑に、勝てようとは思われない。いや、おれは、始終おれの醜い顔を恥じている。そうして、たいていの情事には、おのずからひかえ目になっている。それでさえ、沙金には、氣違ひのように、恋をした。まして、自分の美しさを知っている次郎が、どうして、あの女の見せる媚こびを、返さずにいられよう。――

こう思えば、次郎と沙しや金きんとが、近づくようになるのは、無理もない。が、無理がないだけ、それだけ、おれには苦痛である。弟は、沙金をおれから奪おうとする。――それも、沙金の全部を、おれから奪おうとする。いつかは、そうして必ず。ああ、おれの失うのは、ひとり沙金ばかりではない。弟もいつしよに失うのだ。そうして、そのかわりに、次郎と言う名の敵かたきができる。――おれ

は、敵かたきには用捨しない。敵かたきも、おれに用捨はしないだろう。そう
なれば、落ち着くところは、今からあらかじめわかっている。弟
を殺すか、おれが殺されるか。……)

太郎は、死人しびとのにおいが、鋭く鼻を打つたのに、驚いた。が、
彼の心の中の死が、におつたというわけではない。見ると、猪いのく
熊まの小路のあたり、とある網代あじろの堀へいの下に腐爛ふらんした子供の死骸しがい
が二つ、裸のまま、積み重ねて捨ててある。はげしい天日てんぴに、照
りつけられたせいとか、変色した皮膚のところどころが、べつとり
と紫がかった肉を出して、その上にはまた青蠅あおばえが、何匹となく
止まっている。そればかりではない。一人の子供のうつむけた顔

の下には、もう足の早い蟻ありがついた。――

太郎は、まのあたりに、自分の行く末を見せつけられたような心もちがした。そうして、思わず下くちびるを堅くかんだ。――

「ことに、このごろは、沙金しやきんもおれを避けている。たまに会つても、いい顔をした事は、一度もない。時々はおれに面めんと向かつて、悪口あつこうさえきく事がある。おれはそのたびに腹を立てた。打つた事もある。蹴けつた事もある。が、打っているうちに、蹴けつていっているうちに、おれはいつでも、おれ自身を折檻せつかんしているような心もちがした。それも無理はない。おれの二十年の生しょう涯がいは、沙金のあの目の中に宿っている。だから沙金を失うのは、今までのおれを失うのと、変わりはない。

沙金を失い、弟を失い、そうしてそれともにおれ自身を失つてしまふ。おれはすべてを失う時が来たのかもしれない。……)

そう思ううちに、彼は、もう猪熊いのくまのばばの家の、白い布をぶら下げた戸口へ来た。まだここまでも、死人しびとのにおいは、伝わつて来るが、戸口のかたわらに、暗い緑の葉をたれた枇杷びわがあつて、その影がわずかながら、涼しく窓に落ちてゐる。この木の下を、この戸口へはいつた事は、何度あるかわからない。が、これから
は？

太郎は、急にある氣づかれを感じて、一味の感傷にひたりながら、その目に涙をうかべて、そつと戸口へ立ちよつた。すると、

その時である。家の中から、たちまちけたたましい女の声が、猪いの熊くまの爺おじの声に交じって、彼の耳を貫ぬいた。沙金しゃきんなら、捨ててはおけない。

彼は、入り口の布をあげて、うすぐらい家の中へ、せわしく一足ふみ入れた。

四

猪熊のばばに別れると、次郎は、重い心をいだきながら、立りゆう本寺ほんじの門の石段を、一つずつ数えるように上がって、そのところどころ剥落はくらくした朱塗りの丸柱の下へ来て、疲れたように腰を

おろした。さすがの夏の日も、斜めにつき出した、高い瓦かわらにさえぎられて、ここまではさして来ない。後ろを見ると、うす暗い中に、一体の金剛力士が青蓮花あおれんげを踏みながら、左手の杵きねを高くあげて、胸のあたりに燕つばくらの糞ふんをつけたまま、寂然せきぜんと境内けいだいの昼を守っている。——次郎は、ここへ来て、始めて落ち着いて、自分の心もちが考えられるような気になった。

日の光は、相変わらず目の前の往来を、照り白しらませて、その中にとびかう燕つばくらの羽を、さながら黒繻子くろじゆすか何かのように、光らせている。大きな日傘ひがさをさして、白い水干すいかんを着た男が一人、青竹ふばさみの文ふ挾はにはさんだ文ふみを持って、暑そうにゆつくり通つたあとは、向こうに続いた築土ついでの上へ、影を落とす犬もない。

次郎は、腰にさした扇をぬいて、その黒柿くろがきの骨を、一つずつ指で送ったり、もどしたりしながら、兄と自分との関係を、それからそれへ、思い出した。――

なんで自分は、こう苦しまなければ、ならないのであろう。たった一人の兄は、自分を敵かたきのように思っている。顔を合わせるごとに、こちらから口をきいても、浮かない返事をして、話の腰を折ってしまう。それも、自分と沙金しやきんとが、今のようになつてみれば、無理のない事に相違ない。が、自分は、あの女に会うたびに、始終兄にすまないと思つている。別して、会つたのちのさびしい心もちでは、よく兄がいとしくなつて、人知れない涙もこぼしこぼした。現に、一度なぞは、このまま、兄にも沙金に

も別れて、東国へでも下ろうとさえ、思つた事がある。そうしたら、兄も自分を憎まなくなるだろうし、自分も沙金を忘れられるだろう。そう思つて、よそながら暇いとまごいをするつもりで、兄の所へ会いにゆくと、兄はいつも、そつけなく、自分をあしらつた。そうして、沙金に会うと、——今度は自分が、せつかくの決心を忘れてしまう。が、そのたびに、自分はどのくらい、自分自身を責めた事であろう。

しかし、兄には、自分のこの苦しみがわからない。ただいちずに、自分を、恋の敵かたきだと思つている。自分は、兄にののしられてもいい。顔につばきされてもいい。あるいは場合によつては、殺されてもいい。が、自分が、どのくらい自分の不義を憎んでいる

か、どのくらい兄に同情しているか、それだけは、察していても
らいたい。その上でならば、どんな死にざまをするにしても、兄
の手にかかれれば、本望だ。いや、むしろ、このごろの苦しみより
は、一思いに死んだほうが、どのくらいしあわせだかわからない。

自分は、沙金しゃきんに恋をしている。が、同時に憎んでもいる。あ

の女の多情な性質は、考えただけでも、腹立たしい。その上に、
絶えずうそをつく。それから、兄や自分でさえためらうような、
ひどい人殺しも、平気です。時々、自分は、あの女のみだらな
寝姿をながめながら、どうして、自分がこんな女に、ひかされる
のだろうと思ったりした。ことに、見ず知らずの男にも、なれな
れしく肌はだを任せるのを見た時には、いつそ自分の手で、殺してや

ろうかという気にさえなつた。それほど、自分は、沙金を憎んでいる。が、あの女の目を見ると、自分はやつぱり、誘惑に陥つてしまふ。あの女のように、醜い魂と、美しい肉身とを持った人間は、ほかにいない。

この自分の憎しみも、兄にはわかつていないようだ。いや、元来兄は、自分のように、あの女の獣のような心を、憎んではないないらしい。たとえば、沙^{しやきん}金とほかの男との関係を見るにしても、兄と自分とは全く目がちがう。兄は、あの女がたれといつしよにしているのを見ても、黙っている。あの女の一時の気まぐれは、気まぐれとして、許しているらしい。が、自分は、そういかない。自分にとっては、沙金^{はだみ}が肌身を汚^{けが}す事は、同時に沙金^{はだみ}が心を汚す事

だ。あるいは心を汚すより、以上の事のように思われる。もちろん自分には、あの女の心が、ほかの男に移るのも許されない。が、肌身をほかの男に任せるのは、それよりもなお、苦痛である。それだからこそ、自分は兄に対しても、嫉妬しつとをする。すまないとは思いつながら、嫉妬をする。してみると、兄と自分との恋は、まるでちがう考えが、元になっているのではあるまいか。そうしてそのちがいが、よけい二人の仲を、悪くするのではあるまいか。：

……

次郎は、ぼんやり往来をながめながら、こんな事をしみじみと考えた。すると、ちょうどその時である。突然、けたたましい笑い声が、まばゆい日の光を動かして、往来のどちらかから聞こえ

て来た。と思うと、かん高い女の声が、舌のまわらない男の声といっしょになつて、人もなげに、みだらな冗談を言いかわして来る。次郎は、思わず扇を腰にさして、立ち上がった。

が、柱の下をはなれて、まだ石段へ足をおろすかおろさないうちに、小路を南へ歩いて来た二人の男女が、彼の前を通りかかった。

男は、樺桜の直垂に梨打の烏帽子をかけて、打ち出した。太刀を潤達に佩いた、三十ばかりの年配で、どうやら酒に酔っているらしい。女は、白地にうす紫の模様のある衣を着て、市女笠に被衣をかけているが、声と言ひ、物ごしと言ひ、紛れもない沙金である。——次郎は、石段をおりながら、じつとくち

びるをかんで、目をそらせた。が、二人とも、次郎には、目をかける様子がない。

「じゃよくって。きつと忘れちやいやよ。」

「大丈夫だよ。おれがひきうけたからは、大船おおふねに乗った気でいるがいい」

「だって、わたしのほうじゃ命がけなんですもの。このくらい、念を押さなくちやしようがないわ。」

男は赤ひげの少しある口を、咽のどまで見えるほど、あけて笑いながら、指で、ちよいと沙金の頬ほおを突つついた。

「おれのほうも、これで命がけさ。」

「うまく言っているわ。」

二人は、寺の門の前を通りすぎて、さつき次郎が猪熊いのくまのぼばと別れた辻つじまで行くと、そこに足をとめたまましばらくは、人目も恥じず、ふぎけ合っていたが、やがて、男は、振りかえり振りかえり、何かしきりにからかいながら、辻を東へ折れてしまう。女は、くびすをめぐらして、まだくすくす笑いながら、またこつちへ帰つて来る。——次郎は、石段の下にたたずんで、うれしいのか情けないのか、わからないような感情に動かされながら、子供らしく顔を赤らめて、被衣かすきの中からのぞいている、沙金しゃきんの大きな黒い目を迎えた。

「今のやつを見た？」

沙金は、被衣かすきを開いて、汗ばんだ顔を見せながら、笑い笑い、

問いかけた。

「見なくつてさ。」

「あれはね。——まあここへかけましょう。」

二人は、石段の下の段に、肩をならべて、腰をおろした。幸い、ここには門の外に、ただ一本、細い幹をくねらした、赤松の影が落ちてゐる。

「あれは、藤判官とうぼうがんの所の侍なの。」

沙金は、石段の上に腰をおろすかおろさないのに、市女いちめがさ笠がさをぬいで、こう言った。小柄な、手足の動かし方に猫ねこのような敏びんし捷ようさがある、中肉ちゆうにくの、二十五六の女である。顔は、恐ろしい野性と異常な美しさとが、一つになつたともいふのであろう。

狭い額とゆたかな頬ほおと、あざやかな齒とみだらなくちびると、鋭い目と鷹揚おうような眉まゆと、——すべて、一つになり得そうもないものが、不思議にも一つになつて、しかもそこに、爪つめばかりの無理もない。が、中でもみごとなのは、肩にかけた髪で、これは、日の光のかげんによると、黒い上につややかな青みが浮く。さながら、烏からすの羽根と違いがない。次郎は、いつ見ても変わらない女のなまめかしさを、むしろ憎いように感じたのである。

「そうして、お前さんの情人おとこなんだろう。」

沙金は、目を細くして笑いながら、無邪気らしく、首をふつた。「あいつのばかと言ったら、ないのよ。わたしの言う事なら、なんでも、犬のようにきくじやないの。おかげで、何もかも、すつ

かりわかつてしまった。」

「何がさ。」

「何がって、藤判官とうほうがんの屋敷の様子だよ。そりやひとかたならな
いおしやべりなんでしょう。さつきなんぞは、このごろ、あすこ
で買った馬の話まで、話して聞かしたわ。——そうそう、あの馬
は太郎さんに頼んで盗ませようかしら。陸奥出みちのくでの三才駒さんさいごまだつ
ていうから、まんざらでもないわね。」

「そうだ。兄きなら、なんでもお前の御意次第ぎよいだから。」

「いやだわ。やきもちをやかれるのは、わたし大きらい。それも、
太郎さんなんぞ、——そりやはじめは、わたしのほうでも、少し
はどうとか思ったけれど、今じやもうなんでもないわ。」

「そのうちに、わたしの事もそう言う時が来やしないか。」

「それは、どうだかわかりやしない。」

沙金しやきんは、またかん高い声だかで、笑った。

「おこったの？　じゃ、来ないって言いましょうか。」

「内心女夜叉ないしんによやしやさね。お前は。」

次郎は、顔をしかめながら、足もとの石を拾って、向こうへ投げた。

「そりや、女夜叉によやしやかもしれないわ。ただ、こんな女夜叉によやしやにほられたのが、あなたの因果だわね。——まだうたぐっているの。じゃわたし、もう知らないからいい。」

沙金は、こう言って、しばらくじっと、往來を見つめていたが、

急に鋭い目を、次郎の上に転じると、たちまち冷やややかな微笑が、くちびるをかすめて、一過した。

「そんなに疑うのなら、いい事を教えてあげましようか。」

「いい事？」

「ええ」

女は、顔を次郎のそばへ持つて来た。うす化粧のにおいが、汗にまじって、むんと鼻をつく。——次郎は、身のうちがむずがゆいほど、はげしい衝動を感じて、思わず顔をわきへむけた。

「わたしね、あいつにすつかり、話してしまったの。」

「何を？」

「今夜、みんなで藤判官とうぼうがんの屋敷へ、行くという事を。」

次郎は、耳を信じなかつた。息苦しい官能の刺激も、一瞬の間あいだに消えてしまう。——彼はただ、疑わしげに、むなしく女の顔を見返した。

「そんなに驚かなくたっていいわ。なんでもない事なのよ。」

沙金しやきんは、やや声を低めて、あざわらうような調子を出した。

「わたしこう言ったの。わたしの寝る部屋へやは、あの大路おおじめん面の檜垣ひがきのすぐそばなんです、ゆうべその檜垣ひがきの外で、きつと盗人でしょう、五六人の男が、あなたの所へはいる相談をしているのが聞こえました。それがしかも、今夜なんです。おなじみがいに、教えてあげましたから、それ相当の用心をしないと、あぶのうござんすよって。だから、今夜は、きつと向こうにも、手くばりが

あるわ。あいつも、今人を集めに行つたところなの。二十人や三十人の侍は、くるにちがいをなくつてよ。」

「どうしてまた、そんなよけいな事をしたのさ。」

次郎は、まだ落ち着かない様子で、当惑したらしく、
沙金しやきんの目をうかがつた。

「よけいじゃないわ。」

沙金は、気味悪く、微笑した。そうして、左の手で、そつと次郎の右の手に、さわりながら、

「あなたのためにしたの。」

「どうして？」

こう言いながら、次郎の心には、恐ろしいあるものが感じられ

た。まさか——

「まだわからない？　そう言っておいて、太郎さんに、馬を盗む事を頼めば——ね。いくらなんだって、一人じやかなわないう。よう。いえさ、ほかのものが加勢をしたって、知れたものだけ。

そうすれば、あなたもわたしも、いいじゃないの。」

次郎は、全身に水を浴びせられたような心もちがした。

「兄きを殺す！」

沙しやきん金は、扇をもてあそびながら、素直にうなずいた。

「殺しちや悪い？」

「悪いよりも——兄きを毘わなにかけて——」

「じやあなた殺せて？」

次郎は、沙金の目が、野猫のねこのように鋭く、自分を見つめているのを感じた。そうして、その目の中に、恐ろしい力があつて、それが次第に自分の意志を、麻痺まひさせようとするのを感じた。

「しかし、それは卑怯ひきようだ。」

「卑怯でも、しかたがなくはない？」

沙金しやきんは、扇をすてて、静かに両手で、次郎の右の手をとらえながら、追窮した。

「それも、兄き一人やるのならいいが、仲間を皆、あぶない目に会わせてまで——」

こう言いながら、次郎は、しまったと思つた。狡猾こうかつな女はもちろん、この機会を見のがさない。

「一人やるのならいいの？ なぜ？」

次郎は、女の手をはなして、立ち上がった。そうして、顔の色を変えたまま、黙って、沙金しやきんの前を、右左に歩き出した。

「太郎さんを殺していいんなら、仲間なんぞ何人殺したって、いいでしょう。」

沙金は、下から次郎の顔を見上げながら、一句を射た。

「おばばはどうする？」

「死んだら、死んだ時の事だわ。」

次郎は、立ち止まって、沙金の顔を見おろした。女の目は、侮べつ蔑と愛欲とに燃えて炭火のように熱を持っている。

「あなたのためなら、わたしたれを殺してもいい。」

このことばの中には、蝎さそりのように、人を刺すものがある。次郎は、再び一種の戦慄せんりつを感じた。

「しかし、兄きは——」

「わたしは、親も捨てているのじゃない？」

こう言つて、沙金は、目を落とすと、急に張りつめた顔の表情がゆるんで、焼け砂の上へ、日に光りながらはらはらと涙が落ちた。

「もうあいつに話してしまったのに、——今さら取り返しはつきはしない。——そんな事がわかったら、わたしは——わたしは、仲間——太郎さんに殺されてしまうじゃないの。」

その切れ切れなことばと共に、次郎の心には、おのずから絶望

的な勇氣が、わいてくる。血の色を失つた彼は、黙つて、土にひざをつきながら、冷たい両手に堅く、沙しやきん金の手をとらえた。

彼らは二人とも、その握りあう手のうちに、恐ろしい承諾の意を感じたのである。

五

白い布をかかげて、家の中に一足ふみこんだ太郎は、意外な光景に驚かされた。――

見ると、広くもない部屋へやの中には、廚くりやへ通う遣戸やりどが一枚、斜めに網代屏風あじろびようぶの上へ、倒れかかつて、その拍子にひっくり返つた

ものであろう、蚊やりをたく土器かわらけが、二つになつてころがりながら、一面にあたりへ、燃え残つた青松葉を、灰といつしよにふりまいてゐる。その灰を頭から浴びて、ちぢれ髪ふとの、色の悪い、肥ふとつた、十六七の下衆女げすおんなが一人、これも酒さかぶと肥ふとりに肥ふとつた、はげ頭の老人に、髪ふとの毛をつかまれながら、怪しげな麻ひとえの単衣ひとえの、前もあらわに取り乱したまま、足をばたばた動かして、氣違ひとえいのように、悲鳴を上げる——と、老人は、左手に女の髪をつかんで、右手に口の欠けた瓶子へいしを、空へいしぎまにさし上げながら、その中にすすけた液体を、しいて相手の口へつきこもうとする。が、液体は、いたずらに女の顔を、目と言わず、鼻と言わず、うす黒く横流れするだけで、口へは、ほとんどはいらないらしい。そこで老人は、

いよいよ、気をいらつて無理に女の口を、割ろうとする。女は、とられた髪も、ぬけるほど強く、頭を振つて、一滴もそれを飲むまいとする。手と手と、足と足とが、互いにもつれたり、はなれたりして、明るい所から、急にうす暗い家の中へはいった、太郎の目には、どちらがどちらのからだとも、わからない。が、二人がたれだという事は、もちろん一目見て、それと知れた。――

太郎は、草履ぞうりを脱ぐ間まももどかしそうに、あわただしく部屋へやの中へおどりこむと、とつさに老人の右の手をつかんで、苦もなく瓶へいし子をもぎはなしながら、怒気を帯びて、一喝いっかつした。

「何をする？」

太郎の鋭いこのことば、たちまちかみつくような、老人のこと

ばで答えられた。

「おぬしこそ、何をする。」

「おれか。おれならこうするわ。」

太郎は、瓶子へいしを投げすてて、さらに相手の左の手を、女の髪からひき離すと、足をあげて老人を、遣戸やりどの上へ蹴倒けたおした。不意の救いに驚いたのであろう、阿濃あこぎはあわてて、一二間けんは這いのいたが、老人の後しりえへ倒れたのを見ると、神かみほとけ 仏をおがむように、太郎の前へ手を合わせて、震えながら頭を下げた。と思うと、乱れた髪もつくろわずに、脱兎だつとのごとく身をかわして、はだしのまま、縁を下へ、白い布をひらりとくぐる。——猛然として、追いすがろうとする猪熊いのくまの爺おじを、太郎が再び一いっしゅう蹴して、灰の中に倒し

た時には、彼女はすでに息を切らせて、枇杷びわの木の下の北へ、こ
けつまろびつして、走っていた。……

「助けてくれ。人殺しじや。」

老人は、こうわめきながら、始めの勢いにも似ず、網代屏風あじろびょうぶ
をふみ倒して、廚くりやのほうへ逃げようとする。——太郎は、すばや
く猿臂えんびをのべて、浅黄すいかんの水干えりがみの襟えりがみ上をつかみながら、相手
をそこへ引き倒した。

「人殺し。人殺し。助けてくれ。親殺しじや。」

「ばかな事を。たれがおぬしなぞ殺すものか。」

太郎は、ひぎの下に老人を押し伏せたまま、こう高らかに、あ
ざわらった。が、それと同時に、このおやじを殺したいという欲

望が、おさえがたいほど強く、起こつて来た。殺すのには、もちろんなんのめんどうもない。ただ、一突き——あの赤く皮のたるんでいる頸うなじを、ただ、一突き突きさえすれば、それでもう万事が終わつてしまう。突き通した太刀たちのきつききが、畳へはいる手筈えと、その太刀の柄つかへ感じて来る、断末魔の身もだえと、そうして、また、その太刀を押しもどす勢いで、あふれて来る血のにおいと、——そういう想像は、おのずから太郎の手を、葛つづらま巻きの太刀の柄つかへのばさせた。

「うそじや。うそじや。おぬしは、いつもわしを殺そうと思つて
いる。——やい、たれか助けてくれ。人殺しじや。親殺しじや。」

猪熊いのくまの爺おじは、相手の心を見通したのか、またひとしきりはね

起きようとして、すまいながら、必死になって、わめき立てた。

「おぬしは、なんで阿濃あこぎを、あのような目にあわせた。さあそのしさいを言え。言わねば……」

「言う。言う。——言うがな。言つたあとでも、おぬしの事じゃ。殺さないものでも、なかろう。」

「うるさい。言うか、言わぬか。」

「言う。言う。言う。が、まず、そこを放してくれ。これでは、息がつまって、口がきけぬわ。」

太郎は、それを耳にもかけないように、殺気立った声で、いらだたしく繰り返した。

「言うか、言わぬか。」

「言う。」と、猪熊いのくまの爺おじは、声をふりしぼって、まだはね返さうと、もがきながら、「言うともな。あれはただ、わしが薬をのましようと思うたのじや。それを、あの阿濃あこぎの阿呆あほうめが、どうしても飲みおらぬ。されば、ついわしも手荒な事をした。それだけじや。いや、まだある。薬をこしらえおつたのは、おばばじや。わしの知つた事ではない。」

「薬？　では、墮胎おろしくすり薬だな。いくら阿呆でも、いやがる者をつかまえて、非道な事をするおやじだ。」

「それ見い。言えと言うから、言えば、なおおぬしは、わしを殺す気になるわ。人殺し。極道ごくどう。」

「たれがおぬしを殺すと言つた？」

「殺さぬ気なら、なぜおぬしこそ、太刀の柄へ手をかけているのじゃ。」

老人は、汗にぬれたはげ頭を仰向けて、上目に太郎を見上げながら、口角に泡をためて、こう叫んだ。太郎は、はつと思つた。殺すなら、今だという気が、心頭をかすめて、一閃する。彼は思わず、ひぎに力を入れながら、太刀の柄を握りしめて、老人の頸のあたりをじつと見た。わずかに残つた胡麻塩の毛が、後頭部を半ばおおつた下に、二筋の腱が、赤い鳥肌の皮膚のしわを、そこだけ目だたないように、のぼしている。——太郎は、その頸を見た時に、不思議な憐憫を感じだした。

「人殺し。親殺し。うそつき。親殺し。親殺し。親殺し。」

猪熊いのくまの爺おじは、つづけさまに絶叫しながら、ようやく、太郎のひぎの下からはね起きた。はね起きると、すばやく倒れた遣戸やりどを小盾こたてにとつて、きよろきよろ、目を左右にくばりながら、すきさえあれば、逃げようとする。——その一面に赤く地ばれのした、目も鼻もゆがんでいる、狡猾こつかつらしい顔を見ると、太郎は、今さらのように、殺さなかつたのを後悔した。が、彼はおもむろに太刀の柄から手を離すと、彼自身をあわれむように苦笑をくちびるに浮かべながら、手近の古畳の上へしぶしぶ腰をおろした。

「おぬしを殺すような太刀は、持たぬわ。」

「殺せば、親殺しじやて。」

彼の様子に安心した、猪熊いのくまの爺おじは、そろそろ遣戸やりどの後ろから、

にじり出ながら、太郎のすわったのと、すじかいに敷いた畳の上へ、自分も落ちつかない尻しりをすえた。

「おぬしを殺して、なんで親殺しになる？」

太郎は、目を窓にやりながら、吐き出すように、こう言った。四角に空を切りぬいた窓の中には、枇杷びわの木が、葉の裏表に日を受けて、明暗さまざまな緑の色を、ひっそりと風のないこずえにあつめている。

「親殺しじゃよ。——なぜと言えばな。沙しゃ金きんは、わしの義理の子じゃ。されば、つながるおぬしも、子ではないか。」

「じゃ、その子を妻めにしているおぬしは、なんだ。畜生かな、それともまた、人間かな。」

老人は、さっきの争いに破れた、水干すいかんの袖そでを気にしながら、
うなるような声で言った。

「畜生でも、親殺しはすまいて。」

太郎は、くちびるをゆがめて、あざわらった。

「相変わらず、達者な口だて。」

「何が達者な口じや。」

猪熊いのくまの爺おじは、急に鋭く、太郎の顔をにらめたが、やがてまた、
鼻で笑いながら、

「されば、おぬしにきくがな、おぬしは、このわしを、親と思う
か。いやさ、親と思う事ができるかよ。」

「きくまでもないわ。」

「できまいな」

「おお、できない。」

「それが手前勝手じゃ。よいか。沙しやきん金はおばばのつれ子じゃよ。が、わしの子ではない。されば、おばばにつれそうわしが、沙金を子じゃと思わねばならぬなら、沙金につれそうおぬしも、わしを親じやと思わねばなるまいがな。それをおぬしは、わしを親とも思わぬ。思わぬどころか、場合によつては、打ち打ちやうちやく擲もするではないか。そのおぬしが、わしにばかり、沙金を子と思えとは、どういうわけじゃ。妻めにして悪いとは、どういうわけじゃ。沙金を妻めにするわしが、畜生なら、親を殺そうとするおぬしも、畜生ではないか。」

老人は、勝ち誇った顔色で、しわだらけの人さし指を、相手につきつけるようにしながら、目をかがやかせて、しゃべり立てた。「どうじゃ。わしが無理か、おぬしが無理か、いかなおぬしにも、このくらいな事はわかるであろう。それもわしとおばとは、まだわしが、左兵衛府さひょうえふの下人げにんをしておったころからの昔なじみじゃ。おばが、わしをどう思うたか、それは知らぬ。が、わしはおばけそばを懸想けんそうしていた。」

太郎は、こういう場合、この酒飲みの、狡猾こうかつな、卑しい老人の口から、こういう昔語りを聞こうとは夢にも思っていないなかつた。いや、むしろ、この老人に、人並みの感情があるかどうか、それさえ疑わしいと、思っていた。懸想けんそうした猪熊いのくまの爺おじと懸想けんそうされた

猪熊のばばと、——太郎は、おのずから自分の顔に、一脈の微笑が浮かんで来るのを感じたのである。

「そのうちに、わしはおばばに情人おとこがある事を知ったがな。」

「そんなら、おぬしはきらわれたのじゃないか。」

「情人おとこがあつたとて、わしのきらわれたという、証拠にはならぬ。

話の腰を折るなら、もうやめじや。」

猪熊の爺は、真顔になつて、こう言つたが、すぐまた、ひぎをすすめて、太郎のほうへにじり寄りながら、つばをのみのみ、話しだした。

「そのうちに、おばばがその情人おとこの子をはらんだて。が、これはなんでもない。ただ、驚いたのは、その子を生むと、まもなく、

おばばの行き方が、わからなくなつて、しもうた事じゃ。人に聞けば、疫病えやみで死んだの、筑紫つくしへ下つたのと言ひおるわ。あとで聞けば、なんの、奈良坂ならざかのしるべのもとへ、一時身を寄せておつたげじゃ。が、わしは、それからにわかわかに、この世が味気なくなつてしもうた。されば、酒も飲む、賭博ばくちも打つ。ついには、人に誘われて、まんまと強盗にさえ身をおとしたがな。綾あやを盗めば綾につけ、錦にしきを盗めば、錦につけ、思ひ出すのは、ただ、おばばの事じゃ。それから十年たち、十五年たつて、やつとまたおばばに、めぐり会つてみれば——」

今では全く、太郎と一つ畳にすわりこんだ老人は、ここまで話すと、次第に感情がたかぶつて来たせいせいか、しばらくはただ、涙

に頬ほおをぬらしながら、口ばかり動かして、黙っている。太郎は、片目をあげて、別人を見るように、相手のベそをかけた顔をながめた。

「めぐり会ってみれば、おばばは、もう昔のおばばではない。わしも、昔のわしでなかったのじゃ。が、つれている子の沙しゃ金きんを見れば、昔のおばばがまた、帰つて来たかと思うほど、おもかげがよう似ているて。されば、わしはこう思うた。今、おばばに別れば、沙金ともまた別れなければならぬ。もし沙金と別れまいと思えば、おばばといっしよになるばかりじゃ。よし、ならば、おばばを妻めにしよう——こう思い切つて、持ったのが、この猪いのく熊まの瘦世帯やせじよたいじゃ。……………」

猪熊いのくまの爺おじは、泣き顔を、太郎の顔のそばへ持つて来ながら、涙声でこう言った。すると、その拍子に、今まで気のつかなかった、酒くさいにおいが、ぷんとする。——太郎は、あつけにとられて、扇のかげに、鼻をかくした。

「されば、昔からきようの日まで、わしが命にかけて思うたのは、ただ、昔のお婆おば一人ぎりじゃ。つまりは今の沙金しゃきん一人ぎりじゃよ。それを、おぬしは、何かにつけて、わしを畜生じやなどと言う。このおやじがおぬしは、それほど憎いのか。憎ければ、いっせ殺すがよい。今ここで、殺すがよい。おぬしに殺されれば、わしも本望じゃ。が、よいか、親を殺すからは、おぬしも、畜生じやぞよ。畜生が畜生を殺す——これは、おもしろかろう。」

涙がかわくに從つて、老人はまた、元のように、ふて腐れた悪あ態くたいをつきながら、しわだらけの人さし指をふり立てた。

「畜生が畜生を殺すのじゃ。さあ殺せ。おぬしは、卑怯者ひきようものじゃな。ははあ、さつき、わしが阿濃あこぎに薬をくれようとしたら、おぬしが腹を立てたのを見ると、あの阿呆あほうをはらませたのも、おぬしらしいぞ。そのおぬしが、畜生でのうて、何が畜生じゃ。」

こう言いながら、老人は、いちはやく、倒れた遺戸やりどの向こうへとびのいて、すわと言えば、逃げようとするけはいを示しながら、紫がかった顔じゆうの造作ぞうさくを、憎々しくゆがめて見せる。——太郎は、あまりの雑言ぞうごんに堪えかねて、立ち上がりながら、太刀の柄つかへ手をかけたが、やめて、くちびるを急に動かすとたちまち相

手の顔へ、一塊の痰たんをはきかけた。

「おぬしのような畜生には、これがちようど、相当だわ。」

「畜生呼ばわりは、おいてくれ。沙しゃ金きんは、おぬしばかりの妻めだよ。次郎殿の妻めでもないか。されば、弟の妻めをぬすむおぬしもやはり、畜生じゃ。」

太郎は、再びこのおやじを殺さなかつた事を後悔した。が、同時にまた、殺そうという気の起こる事を恐れもした。そこで、彼は、片目を火のようにひらめかせながら、黙もくつて、席を蹴けつて去ろうとする——すると、その後ろから、猪熊いのくまの爺おじはまた、指をふりふり、罵詈ばりを浴びせかけた。

「おぬしは、今の話をはんとうだと思ふか。あれは、みんなうそ

じや。ばばが昔なじみじやというのも、うそなら、沙金がおぼばに似ているというのもうそじや。よいか。あれは、みんなうそじや。が、とがめたくも、おぬしはとがめられまい。わしはうそつきじやよ。畜生じやよ。おぬしに殺されそくなった、人でなしじやよ。……………」

老人は、こう唾罵だばを飛ばしながら、おいおい、呂律ろれつがまわらなくなつて来た。が、なおも濁つた目に懸命ぞうおの憎悪を集めながら、足を踏み鳴らして、意味のない事を叫びつづける。——太郎は、堪えがたい嫌悪けんおの情に襲われて、耳をおおうようにしながら、そ々、猪熊いのくまの家を出た。外には、やや傾きかかった日がさして、相変わらずその中を、燕つばくらが軽々と流れている。——

「どこへ行こう。」

外へ出て、思わずこう小首を傾けた太郎は、ふとさつきまでは、自分が沙金しやきんに会うつもりで、猪熊へ来たのに、気がついた。が、どこへ行ったら、沙金に会えるという、当てもない。

「ままよ。羅生門らしようもんへ行つて、日の暮れるのも待とう。」

彼のこの決心には、もちろん、いくぶん沙金に会えるという望みが、隠れている。沙金は、日ごろから、強盗にはいる夜よには、好んで、男装束おとこしやうぞくに身をやつした。その装束や打ち物は、みな羅生門の楼上に、皮子かわごへ入れてしまつてある。——彼は、心をきめて、小路こうじを南へ、大またに歩きだした。

それから、三条を西へ折れて、耳敏川みみとがわの向こう岸を、四条ま

で下つてゆく——ちようど、その四条の大路おおじへ出た時の事である。太郎は、一いっちよう町を隔てて、この大路を北へ、立本寺りゆうほんじの築土ついでしの下を、話しながら通りかかる、二人の男女なんによの姿を見た。

朽ち葉色の水すいかん干とうす紫の衣きぬとが、影を二つ重ねながら、はればれした笑い声をあとに残して、小路こうじから小路へ通りすぎる。めまぐるしい燕つばくらの中に、男の黒鞆くろぎやの太刀たちが、きらりと日に光つたかと思うと、二人はもう見えなくなつた。

太郎は、額を曇らせながら、思わず道ばたに足をとめて、苦しうにつぶやいた。

「どうせみんな畜生だ。」

六

ふけやすい夏の夜は、早くも亥の上刻に迫つて来た。――

月はまだ上らない。見渡す限り、重苦しいやみの中に、声もなく眠っている京の町は、加茂川の水面がかすかな星の光をうけて、ほのかに白く光っているばかり、大路小路の辻々にも、今はようやく灯影が絶えて、内裏といい、すすき原といい、町家と、ことごとく、静かな夜空の下に、色も形もおぼろげな、ただ広い平面を、ただ、際限もなく広げている。それがまた、右京左京の区別なく、どこも森閑と音を絶つて、たまに耳にはいるのは、すじかに声を飛ばすほととぎすのほか、何もない。もし

その中に一点でも、人なつかしい火がゆらめいて、かすかなもの
 の声が聞こえたとすれば、それは、香の煙のたちこめた大寺の内
 陣で、金泥も緑青も所斑な、孔雀明王の画像の前に、
 常燈明の光をたのむ参籠の人々か、さもなくば、四条五
 条の橋の下で、短夜を芥火の影にぬすむ、こじき法師の群れで
 あろう。あるいはまた、夜な夜な、往來の人をおびやかす朱雀
 門の古狐が、瓦の上、草の間に、ともすともなくともすと
 いう、鬼火のたぐいであるかもしれない。が、そのほかは、北は
 千本、南の鳥羽街道の境を尽くして、蚊やりの煙のにおいのす
 る、夜色の底に埋もれながら、河原よもぎの葉を動かす、微風
 もまるで知らないように、沈々としてふけている。

その時、王城の北、朱雀大路すざくおおじのはずれにある、羅生門らしやうもんのほとりには、時ならない弦打ちの音が、さながら蝙蝠こうもりの羽音のよう
に、互いに呼びつ答えつして、あるいは一人、あるいは三人、あ
るいは五人、あるいは八人、怪しげないたちをしたものの姿が、
次第にどこからか、つどつて来た。おぼつかない星明かりに透か
して見れば、太刀たちをはくもの、矢を負うもの、斧おのを執るもの、戟ほこ
を持つもの、皆それぞれ、得物えものに身を固めて、脛布はばき藁わろう沓うずの装い
もかいがいしく、門の前に渡した石橋へ、むらむらと集まって、
列を作る——と、まっさきには、太郎がいた。それにつづいて、
さつきの争いも忘れたように、猪熊いのくまの爺おじが、物々しく鉾ほこの先を、
きらりと暗やみにひらめかせる。続いて、次郎、猪熊いのくまのばば、少し

離れて、阿濃あこぎもいる。それにかこまれて、沙金しゃきんは一人、黒い水す
いかん干たちに太刀をはいて、胡籛やなぐいを背に弓杖ゆんづえをつきながら、一同を
 見渡して、あでやかな口を開いた。――

「いいかい。今夜の仕事は、いつもより手ごわい相手なんだから
 ね。みなそのつもりで、いておくれ。さしずめ十五六人は、太郎
 さんといつしよに、裏から、あとはわたしといつしよに、表から
 はいってもらおう。中でも目ぼしいのは、裏の厩うまやにいる陸奥出みちのくで
 の馬だがね。これは、太郎さん、あなたに頼んでおくれ。よくつ
 て。」

太郎は、黙って星を見ていたが、これを聞くと、くちびるをゆ
 がめながら、うなずいた。

「それから断わっておくが、女子供を質になんぞとっては、いけないよ。あとの始末がめんどうだからね。じゃ、人数にんずがそろつたら、そろそろ出かけよう。」

こう言つて、沙金は弓をあげて、一同をさしまねいたが、しよんぼり、指をかねで立っている、阿濃を顧みると、またやさしくことばを添えた。

「じゃ、お前はここで、待っていておくれ。一刻いっときか二刻ふたときで、皆帰ってくるからね。」

阿濃は、子供のようになつて、うつとり沙金の顔を見て、静かに合点がてんした。

「されば、行ゆこう。ぬかるまいぞ、多たじようまる襄丸。」

猪熊いのくまの爺おじは、戟ほこをたばさみながら、隣にいる仲間をふり返つた。蘇芳染すおうぞめの水干すいかんを着た相手は、太刀たちのつばを鳴らして、「ふふん」と言つたまま、答えない。そのかわりに、斧おのをかついだ、青ひげのさわやかな男が、横あいから、口を出した。

「おぬしこそ、また影法師なぞにおびえまいぞ。」

これと共に、二十三人の盗人どもは、ひとしく忍び笑いをもらしながら、沙金しゃきんを中に、雨雲のむらがるごとく、一団の殺気をこめて、朱雀大路すざくおおじへ押し出すと、みぞをあふれた泥水どろみずが、くぼ地くぼ地へ引かれるようにやみにまぎれて、どこへ行つたか、たちまちのうちに、見えなくなつた。……

あとには、ただ、いつか月しろのした、うす明るい空にそむい

て、羅生門らしやうもんの高い藁いらかが、寂然せきぜんと大路を見おろしているばかり、
またしてもほととぎすの、声がおちこちに断続して、今まで七丈
五級の大石段に、たたずんでいた阿濃あこぎの姿も、どこへ行つたか、
見えなくなった。——が、まもなく、門上の楼に、おぼつかない
灯ひがともつて、窓が一つ、かたりとあくど、その窓から、遠い月
の出をながめている、小さな女の顔が出た。阿濃は、こうして、
次第に明るくなってゆく京の町を、目の下に見おろしながら、胎
児の動くのを感じるごとに、ひとりうれしそうに、ほほえんでい
るのである。

次郎は、二人の侍と三頭の犬とを相手にして、血にまみれた太刀ちをふるいながら、小路こうじを南へ二三町、下るともなく下つて来た。今は沙しゃ金きんの安否を気づかっている余裕もない。侍は衆をたのんで、すきまもなく切りかける。犬も毛の逆立った背をそびやかに、前後をきらわず、飛びかかった。おりからの月の光に、往来は、ほのかながら、打つ太刀をたがわせないほどに、明るくなっている。——次郎は、その中で、人と犬とに四方を囲まれながら、必死になつて、切りむすんだ。

相手を殺すか、相手に殺されるか、二つに一つより生きる道はない。彼の心には、こういう覚悟と共に、ほとんど常軌を逸した、

凶猛な勇氣が、刻々に力を増して来た。相手の太刀を受け止めて、それを向こうへ切り返しながら、足もとを襲おうとする犬を、とつきに横へかわしてしまふ。——彼は、この働きをほとんど同時にした。そればかりではない。どうかするとその拍子に切り返した太刀を、逆にまわして、後ろから来る犬の牙を、防がなければならぬ事さえある。それでもさすがにいつか傷をうけたのである。月明かりにすかして見ると、赤黒いものが一すじ、汗ににじんで、左の小鬢こびんから流れている。が、死に身になった次郎には、その痛みも気にならない。彼は、ただ、色を失った額に、ひいでた眉まゆを一字にひそめながら、あたかも太刀たちに使われる人のように、烏帽子えぼしも落ち、水干すいかんも破れたまま、縦横やいばに刃を交えている。

のである。

それがどのくらい続いたか、わからない。が、やがて、上段に太刀をふりかざした侍の一人が、急に半身を後ろへそらせて、けたたましい悲鳴をあげたと思うと、次郎の太刀は、早くもその男の脾腹ひばらを斜めに、腰のつがいまで切りこんだのであろう。骨を切る音が鈍く響いて、横に薙ないだ太刀の光が、うすやみをやぶつてきらりとする。——と、その太刀が宙におどつて、もう一人の侍の太刀を、ちようと下から払ったと見る間に、相手は肘ひじをしたたか切られて、やにわに元来もとたほうへ、敗走した。それを次郎が追いつき、切ろうとしたのと、狩犬の一頭が鞆まりのように身をはずませて、彼の手もとへかぶりついたのが、ほとんど、同

時の働きである。彼は、一足あとへとびのきながら、ふりむかつた血刀の下に、全身の筋肉が一時にゆるむような気落ちを感じて、月に黒く逃げてゆく相手の後ろ姿を見送った。そうしてそれと共に、悪夢からさめた人のような心もちで、今自分のいる所が、ほかならない立本寺りゅうほんじの門前だという事に気がついた。――

これから半刻ほんときばかり以前の事である。藤判官とうほうがんの屋敷を、表から襲った偷盗ちゆうとうの一群は、中門の右左、車宿りの内外うちそとから、思いもかけず射出した矢に、まず肝を破られた。まつさきに進んだ真木島まきのしまの十郎が、太腿ふとももを篋深のぶかく射られて、すべるようにどろどろと倒れる。それを始めとして、またたく間にま二三人、あるいは顔を破り、あるいは臂ひじを傷つけて、あわただしく後ろを見せた。

射手の数は、もちろん何人だかわからない。が、染め羽白羽のとがり矢は、中には物々しい鏑の音さえ交えて、またひとしきり飛んで来る。後ろに下がっていた沙金でさえ、ついには黒い水の袖を斜めに、流れ矢に射通された。

「お頭にけがをさすな。射ろ。射ろ。味方の矢にも、鏟があるぞ

。」

交野の平六が、斧の柄をたたいて、こうののしると、「おう」

という答えがあつて、たちまち盗人の中からも、また矢叫びの聲が上がり始める。太刀の柄に手をかけて、やはり後ろに下がっていた次郎は、平六のこのことばに、一種の苛責を感じながら、見ないようにして沙金の顔を横からそつとのぞいて見た。沙金は、

この騒ぎのうちにも冷然とたたずみながら、ことさら月の光にそむきいて、弓杖ゆんづえをついたまま、口角の微笑もかくさず、じつと矢の飛びかうのを、ながめている。——すると、平六が、またいら立たしい声を上げて、横あいから、こう叫んだ。

「なぜ十郎を捨てておくのじゃ。おぬしたちは矢玉が恐ろしゆうて、仲間を見殺しにする気かよ。」

太腿ふとももを縫われた十郎は、立ちたくも立てないのであろう、太刀ちを杖つつえにして居ざりながら、ちようど羽根をぬかれた鴉からすのように、矢を避け避け、もがいている。次郎は、それを見ると、異様な戦せ慄んりつを覚えて、思わず腰の太刀をぬき払った。が、平六はそれを知ると、流し目にじろりと彼の顔を見て、

「おぬしは、お頭かしらに付き添うていればよい。十郎の始末は、小こぬす盗人びとでたくさんじゃ。」と、あざけるように言い放った。

次郎は、このことばに皮肉な侮蔑ぶべつを感じて、くちびるをかみながら、鋭く平六の顔を見返した。——すると、ちようどそのとたんである。十郎を救おうとして、ばらばらと走り寄った、盗人たちの機先を制して、耳をつんざく一いっせい声の角つのを合あ図ずに、粉々として乱れる矢の中を、門の内から耳のどがった、牙きばの鋭い、狩犬が六七頭すさまじいうなり声を立てながら、夜目にも白くほこりを巻いて、まっしぐらに衝ついて出た。続いてそのあとから十人十五人、手に手に打ち物を取った侍が、先を争って屋敷の外へ、ひしめきながらあふれて来る。味方ももちろん、見てはいない。斧おのを

ふりかざした平六を先に立てて、太刀や鉾ほこが林のように、きらめきながら並んだ中から、人とも獣けものともつかない声を、たれとも知らずわつと上げると、始めのひるんだけしきにも似ず一度に備えを立て直して、猛然として殺到する。沙しやきん金も、今は弓にたかうすびよりの矢をつがえて、まだ微笑を絶たない顔に、一脈の殺気を浮かべながら、すばやく道つじばたの築土ついでのこわれを小楯にとつて、身がまえた。――

やがて敵と味方は、見る見るうちに一つになって、気の違つたようにわめきながら、十郎の倒れている前後をめぐつて、無二無三に打ち合い始めた。その中にまた、狩犬がけたたましく、血に飢えた声を響かせて、戦いはいずれが勝つとも、しばらくの間は

わからない。そこへ一人、裏へまわった仲間の一人が、汗と埃ほこりとにまみれながら、二三か所薄手を負うた様子で、血に染まったまかけつけた。肩にかついだ太刀の刃のこぼれでは、このほうの戦いも、やはり存外手痛かつたらしい。

「あつちは皆ひき上げますぜ。」

その男は、月あかりにすかしながら、沙金の前へ来ると、息を切らし切らし、こう言つた。

「なにしろ肝腎かんじんの太郎さんが、門の中で、やつらに囲まれてしまったという騒ぎでしてな。」

沙金しやきんと次郎とは、うす暗い築土ついでじの影の中で、思わず目と目を見合わせた。

「囲まれて、どうしたえ。」

「どうしたか、わかりません。が、事によると、——まあそれもあの人の事だから、万々ばんばん大丈夫だろうと思えますがな。」

次郎は、顔をそむけながら、沙金のそばを離れた。が、小盗こぬすび人はもちろんそんな事は、気にとめない。

「それにおじじやおばばまで、手を負ったようでした。あのぶんじゃ殺されたやつも、四五人はありましょう。」

沙金はうなずいた。そうして次郎のあとから追いかけるように、
険のある声で、

「じゃ、わたしたちもひき上げましょう。次郎さん、口笛を吹いてちようだい。」と言った。

次郎は、あらゆる表情が、凝り固まったような顔をしながら、左手の指を口へ含んで、鋭く二声、口笛の音を飛ばせた。これが、仲間だけに知られている、引き揚げの時の合図である。が、盗人たちは、この口笛を聞いても、踵くびすをめぐらす様子がない。（実は、人と犬にとりかこまれてめぐらすだけの余裕がなかったせいであろう。）口笛の音は、蒸し暑い夜の空気を破つて、むなしく小路うじの向こうに消えた。そうしてそのあとには、人の叫ぶ声と、犬のほえる声と、それから太刀たちの打ち合う音とが、はるかな空の星を動かして、いつそう騒然と、立ちのぼった。

沙金しゃきんは、月を仰ぎながら、稲妻のごとく眉まゆを動かした。

「しかたがないわね。じゃ、わたしたちだけ帰りましょう。」

そういう話のまだ終わらないうちに、そうして、次郎がそれを聞かないもののように、再び指を口に含んで相図を吹こうとした時に、盗人たちの何人かが、むらむらと備えを乱して、左右へ分かれた中から、人と犬とが一つになって、二人の近くへ迫つて来た。——と思うと、沙金の手ゆがえに弓返りの音がして、まっさきに進んだ白犬が一頭、たかうすびよりの矢に腹を縫われて、苦鳴と共に、横に倒れる。見る間に、黒血がその腹から、斑々はんぱんとして砂にたれた。が、犬に続いた一人の男は、それにもおじず、太刀をふりかざして、横あいから次郎に切つてかかる。その太刀が、ほとんど無意識に受けとめた、次郎の太刀の刃を打つて、鏘然そうぜんとした響きと共に、またたく間あいだ、火花を散らした。——次郎はその

時、月あかりに、汗にぬれた赤ひげと切り裂かれたかばぎくら樺かばぎくら桜の直ひ垂たれとを、相手の男に認めたのである。

彼は直じきげ下に、立りゆうほんじ本寺の門前を、ありありと目に浮かべた。そうして、それと共に、恐ろしい疑惑が、突然として、彼を脅かした。沙しゃきん金はこの男と腹を合わせて、兄のみならず、自分をも殺そうとするのではあるまいか。一髪かんの間にこういう疑いをいだいた次郎は、目の前が暗くなるような怒りを感じて、相手の太刀たちの下を、脱だつと兎のごとく、くぐりぬけると、両手に堅く握った太刀を、奮然として、相手の胸に突き刺した。そうして、ひとたまりもなく倒れる相手の男の顔を、したたか藁わろうず沓でふみにじった。

彼は、相手の血が、生暖かく彼の手にかかったのを感じた。太

刀の先が^{あばら}肋の骨に触れて、強い抵抗を受けたのを感じた。そうしてまた、断末魔の相手が、ふみつけた彼の^{わろうず}藁沓に、下から何度もかみついたのを感じた。それが、彼の^{ふくしゅうしん}復讐心に、快い刺激を与えたのは、もちろんである。が、それにつれて、彼はまた、ある名状しがたい心の疲労に、襲われた。もし周囲が周囲だったら、彼は必ずそこに身を投げ出して、飽くまで休息をむさぼった事であろう。しかし、彼が相手の顔をふみつけて、血のしたたる太刀を向こうの胸から引きぬいているうちに、もう何人かの侍は、四方から彼をとり囲んだ。いや、すでに後ろから、忍びよった男の^{ほこ}鋒は、危うく^{きつさき}鋒を、彼の背に擬している。が、その男は、不意に前へよろめくと、^{すいかん}鋒の先に次郎の水干の^{そで}袖を裂いて、うつむ

けにがくりと倒れた。たかうすびよの矢が一筋、颯然さつぜんと風を切りながら、ひとゆりゆつて後頭部へ、ぐさと篋のぶか深く立つたからである。

それからのちの事は、次郎にも、まるで夢のようにしか思われない。彼はただ、前後左右から落ちて来る太刀たちの中に、獣のようになうなり声を出して、相手を選まず渡り合つた。周囲に沸き返っている、声とも音ともつかない物の響きと、その中に出没する、血と汗とにまみれた人の顔と——そのほかのものは、何も目にはいらない。ただ、さすがに、あとにのこして来た沙金しゃきんの事が、太刀からほとばしる火花のように、時々心にひらめいた。が、ひらめいたと思ううちに、刻々迫ってくる生死の危急が、たちまち

それをかき消してしまふ。そうして、そのあとにはまた、太刀音と矢たけびとが、天をおおう蝗いなごの羽音のように、築土つじにせかれた小路こうじの中で、とめどもなくわき返つた。——次郎は、こういう勢いに促されて、いつか二人の侍と三頭の犬とに追われながら、小路を南へ少しずつ切り立てられて来たのである。

が、相手の一人を殺し、一人を追いはらつたあとで、犬だけなら、恐れる事もないと思つたのは、結局次郎の空だのみにすぎなかつた。犬は三頭が三頭ながら、大きさも毛なみも一對な茶まだらの逸物いちもつで、子牛もこれにくらべれば、大きい事はあつても、小さい事はない。それが皆、口のまわりを人間の血にぬらして、前に変わらず彼の足もとへ、左右から襲いかかつた。一頭の頤あごを

蹴返すと、一頭が肩先へおどりかかる。それと同時に、一頭の牙きばが、すんでに太刀たちを持った手を、かもうとした。とまた、三頭とも巴ともえのように、彼の前後に輪を描いて、尾を空ざまに上げながら、砂のにおいをかぐように、頤あごを前足へすりつけて、びようびようとほえ立てる。——相手を殺したのに、気のゆるんだ次郎は、前よりもいっそう、この狩犬の執拗しゆうねい働きに悩まされた。

しかも、いら立てば立つほど、彼の打つ太刀は皆空くうを切つて、ややともすれば、足場を失わせようとする。犬は、そのすきに乗じて、熱い息を吐きながら、いよいよ休みなく肉薄した。もうこうなつては、ただ、窮余の一策しか残っていない。そこで、彼は、事によつたら、犬が追いかぐんで、どこかに逃げ場ができるかも

しれないという、一縷いちるの望みにたよりながら、打ちはずした太刀を引いて、おりから足をねらった犬の背を危うく向こうへとび越えると、月の光をたよりにして、ひた走りに走り出した。が、もとよりこの企ても、しよせんはおぼれようとするものが、藁わらでもつかむのと変わりはない。犬は、彼が逃げるのを見ると、ひとしくきりりと尾を巻いて、あと足に砂を蹴け上げながら真一文字に追いつがった。

が、彼のこの企ては、単に失敗したというだけの事ではない。実はそれがために、かえって虎口こうにはいるような事ができたのである。——次郎は立本寺りゅうほんじの辻つじをきわどく西へ切れて、ものの二町と走るか走らないうちに、たちまち行く手の夜を破って、今自

身を追っている犬の声より、より多くの犬の声が、耳を貫ぬいて起こるのを聞いた。それから、月に白しらんだ小路こうじをふさいで、黒雲に足のはえたような犬の群れが、右往左往に入り乱れて、餌食えじきを争っているさまが見えた。最後に——それはほとんど寸刻のいとまもなかつたくらいである。すばやく彼を駆けぬけた狩犬の一头が、友を集めるように高くほえると、そこに狂きんっていた犬の群れは、ことごとく相呼び相答えて、一度にぎんぎん 々の声うずまをあげながら、見る間に彼を、その生きて動く、なまぐさい毛皮の渦巻うずまきの中へ巻きこんだ。深夜、この小路に、こうまで犬の集まっていたのは、もとよりいつもある事ではない。次郎は、この廃都をわが物顔に、十二と頭をそろえて、血のにおいに飢えて歩く、獐どうもう猛な野犬

の群れが、ここに捨ててあつた疫病えやみの女を、宵よいのうちから餌食にして、互いに牙きばをかみながら、そのちぎれちぎれな肉や骨を、奪い合っているところへ、来たのである。

犬は、新しい餌食を見ると、一瞬のいとまもなく、あらしに吹かれて飛ぶ稲穂のように、八方から次郎へ飛びかかった。たくましい黒犬が、太刀たちの上をおどり越えると、尾のない狐きつねに似た犬が、後ろから来て、肩をかすめる。血にぬれた口ひげが、ひやりと頬ほおにさわったかと思うと、砂だらけな足の毛が、斜めに眉まゆの間をなでた。切ろうにも突こうにも、どれと相手を定める事ができない。前を見ても、後ろを見ても、ただ、青くかがやいている目と、絶えずあえいでいる口とがあるばかり、しかもその目とその口が、

数限りもなく、道をうずめて、ひしひしと足もとに迫つて来る。

——次郎は、太刀たちを回しながら、急に、猪熊いのくまのばばの話を思い出した。「どうせ死ぬのなら一思いに死んだほうがいい。」彼は、そう心に叫んで、いさぎよく目をつぶったが、喉のどをかもうとする犬の息が、暖かく顔へかかると、思わずまた、目をあいて、横なぐりに太刀をふるった。何度それを繰り返したか、わからない。しかし、そのうちに、腕の力が、次第に衰えて来たのである。打つ太刀が、一太刀ごとに重くなった。今では踏む足さえ危うくなった。そこへ、切った犬の数よりも、はるかに多い野犬の群れが、あるいは芒すすきはら原の向こうから、あるいは築土ついでじのこわれをぬけて、続々として、つどつて来る。——

次郎は、絶望の目をあげて、天上の小さな月を一瞥いちべつしながら、太刀を両手にかまえたまま、兄の事や沙金しゃきんの事を、一度に石火せつかのごとく、思い浮かべた。兄を殺そうとした自分が、かえつて犬に食われて死ぬ。これより至極しごくな天罰はない。——そう思うと、彼の目には、おのずから涙が浮かんた。が、犬はその間も、用捨はしない。さつきの狩犬の一頭が、ひらりと茶まだらな尾をふるったかと思うと、次郎はたちまち左の太腿ふとももに、鋭い牙きばの立つたのを感じた。

するとその時である。月にほのめいた両京二十七坊の夜の底から、かまびすしい犬の声を圧してはるかに憂かつかつ々たる馬蹄ばていの音が、風のように空へあがり始めた。……

しかしその間も阿濃あこぎだけは、安らかな微笑を浮かべながら、羅ら生門しょうもんの楼上にたたずんで、遠くの月の出をながめている。東山の上が、うす明るく青んだ中に、ひでりにやせた月は、おもむろにさみしく、中なかぞら空に上つてゆく。それにつれて、加茂川にかかっている橋が、その白しらじら々とした水すずびか光りの上に、いつか暗く浮き上がって来た。

ひとり加茂川ばかりではない。さつきまでは、目の下に黒く死し人びとのにおいを蔵くっていた京の町も、わずかの間まに、つめたい光の

鍍金めつきをかけられて、今では、越こしの国の人が見るといふ蜃気楼かいやぐらの
 ように、塔の九輪や伽藍がらんの屋根を、おぼつかなく光らせながら、
 ほのかな明るみと影との中に、あらゆる物象を、ぼんやりとつ
 んでいる。町をめぐる山々も、日中のほとぼりを返しているの
 であろう、おのずから頂きをおぼろげな月明かりにぼかしながら、
 どの峰も、じつと物を思つてでもいるように、うすい靄もやの上から、
 静かに荒廃した町を見おろしている——と、その中で、かすかに
 のうぜんかざら
 凌りやう霄せう花かのにおいがした。門の左右を埋うずめる藪やぶのところど
 から、簇そう々そうとつるをのぼしたその花が、今では古びた門の柱に
 まといついて、ずり落ちそうになつた瓦かわらの上や、蜘蛛くもの巣をかけ
 た檻たるきの間へ、はい上がったのがあるからであろう。……

窓によりかかった阿濃あこぎは、鼻の穴を大きくして、思い入れ凌霄花のにおいを吸いながら、なつかしい次郎の事を、そうして、早く日の目を見ようとして、動いている胎児の事を、それからそれへと、とめどなく思いつづけた。——彼女は双親ふたおやを覚えていない。生まれた所の様子さえ、もう全く忘れている。なんでも幼い時に一度、この羅生門らしやうもんのような、大きな丹塗りの門にぬの下を、たれかに抱くか、負われかして、通ったという記憶がある。が、これももちろん、どのくらいほんとうだか、確かな事はわからない。ただ、どうにかこうにか、覚えているのは、物心がついてからのちの事ばかりである。そうして、それがまた、覚えていないほうがよかつたと思うような事ばかりである。ある時は、町の子供に

いじめられて、五条の橋の上から河原へ、さかさまにつき落とされた。ある時は、飢えにせまつてした盗みの咎とがで、裸のまま、地藏堂うつばりの梁へつり上げられた。それがふと沙しゃきん金に助けられて、自然とこの盗人の群れにはいったが、それでも苦しい目にあう事は、以前と少しも変わりがない。白痴に近い天性を持つて生まれた彼女にも、苦しみを、苦しみとして感じる心はある。阿濃あこぎは猪熊いのくまのばばの氣に逆らつては、よくむごたらしく打ちようちやく擲された。猪熊おじの爺には、酔つた勢いで、よく無理難題を言いかけられた。ふだんは何かといたわつてくれる沙しゃきん金でさえ、癩かんにさわると、彼女の髪の毛をつかんで、ずるずる引きずりまわす事がある。まして、ほかの盗人たちは、打つにもたたくにも、用捨はない。阿濃

は、そのたびにいつもこの羅生門らしやうもんの上へ逃げて来ては、ひとり
 でしくしく泣いていた。もし次郎が来なかつたら、そうして時々、
 やさしいことばをかけてくれなかつたら、おそらくとうにこの門
 の下へ身を投げて、死んでしまっていた事であろう。

煤すすのようなものが、ひらひらと月にひるがえつて、藪いらかの下から、
 窓の外をうす青い空へ上がった。言うまでもなく蝙蝠こうもりである。

阿濃は、その空へ目をやって、まばらな星に、うつとりとながめ
 入った。——するとまたひとしきり、腹の子が、身動きをする。

彼女は急に耳をすますようにして、その身動きに気をつけた。彼
 女の心が、人間の苦しみをのがれようとして、もがくように、腹
 の子はまた、人間の苦しみを嘗なめに来ようとして、もがいている。

が、阿濃は、そんな事は考えない。ただ、母になるといふ喜びだけが、そうして、また、自分も母になれるといふ喜びだけが、こののうぜんかざら凌霄花のにおいのように、さつきから彼女の心をいつぱいにしてゐるからである。

そのうちに、彼女はふと、胎児が動くのは、眠れないからではないかと思ひだした。事によると、眠られないあまりに、小さな手や足を動かして、泣いてでもいるのかもしれない。「坊やはいい子だね。おとなしく、ねんねしておいで、今にじき夜が明けるよ。」——彼女は、こう胎児にささやいた。が、腹の中の身動きは、やみそうで、容易にやまない。そのうちに痛みさえ、どうやら少しずつ加わつて来る。阿濃は、あこぎ窓を離れて、その下にうづく

まりながら、結び燈台のうす暗い灯ひにそむいて、腹の中の子を慰めようと、細い声で歌をうたった。

君をおきて

あだし心を

われ持たばや

なよや、末の松山

波も越えなむや

波も越えなむ

うろ覚えに覚えた歌の声は、灯ひのゆれるのに従って、ふるえふるえ、しんとした楼の中に断続した。歌は、次郎が好んでうたう歌である。酔うと、彼は必ず、扇で拍子を取りながら、目をねむ

つて、何度もこの歌をうたう。沙金しやきんはよく、その節回しがおかしいと言つて、手を打つて笑つた。——その歌を、腹の中の子が、喜ばないというはずはない。

しかし、その子が、実際次郎の胤たねかどうか、それは、たれも知つてゐるものがない。阿濃あしぎ自身も、この事だけは、全く口をつぐんでゐる。たとえ盗人たちが、意地悪く子の親を問いつめても、彼女は両手を胸に組んだまま、はずかしそうに目を伏せて、いよいよ執拗しゅうねく黙つてしまふ。そういう時は、必ず垢あかじみた彼女の顔に女らしい血の色がさして、いつか睫毛まつげにも、涙がたまつて来る。盗人たちは、それを見ると、ますます何かとはやし立てて、腹の子の親さえ知らない、阿呆あほうな彼女をあざわらつた。が、阿濃

は胎児が次郎の子だという事を、かたく心の中で信じている。そうして、自分の恋している次郎の子が、自分の腹にやどるのは、当然な事だと信じている。この楼の上で、ひとりさびしく寝るごとに、必ず夢に見るあの次郎が、親でなかったとしたならば、それがこの子の親であろう。——阿濃は、この時、歌をうたいながら、遠い所を見るような目をして、蚊に刺されるのも知らずに、うつつながら夢を見た。人間の苦しみを忘れた、しかもまた人間の苦しみに色づけられた、うつくしく、いたましい夢である。

（涙を知らないものの見る事ができる夢ではない。）そこでは、いっさいの悪が、眼底を払って、消えてしまう。が、人間の悲しみだけは、——空をみたしている月の光のように、大きな人間の

悲しみだけは、やはりさびしくおごそかに残っている。……

なよや、末の松山

波も越えなむや

波も越えなむ

歌の声は、ともし火の光のように、次第に細りながら消えていった。そうして、それと共に、力のない呻しんぎん吟ぎんの声こゑが、暗やみを誘うごとく、かすかにもれ始めた。阿濃あこぎは、歌の半ばで、突然下腹に、鋭い疼とうつう痛を感じ出したのである。

相手の用意に裏をかかれた盗人の群れは、裏門を襲つた一隊も、防ぎ矢に射しらまされたのを始めとして、ちゆうもん中門を打つて出た侍たちに、やはり手痛い逆撃さかうちをくらわせられた。たかが青侍の腕だてと思ひ侮せんでつていた先手の何人かも、算を乱しながら、背そびらを見せる——中でも、臆おくびよう病な猪熊いのくまの爺おじは、たれよりも先に逃げかかったが、どうした拍子か、方角を誤つて、太刀たちをぬきつれた侍たちのただ中へ、はいるともなく、はいつてしまった。酒さかぶ肥とりした体格と言ひ、物々しく銚ほこをひっさげた様子と言ひ、ひとかど手なみのすぐれたものと、思われでもしたのであろう。侍たちは、彼を見ると、互いに目くばせをかわしながら、二人三人、きつさき鋒をそろえたまま、じりじり前後から、つめよせて来た。

「はやるまいぞ。わしはこの殿の家人けにんじゃ。」

猪熊いのくまの爺おじは、苦しまぎれにあわただしくこう叫んだ。

「うそをつけ。——おのれにたばかれるような阿呆あほうと思うか。——往生きわの悪いおやじじゃ。」

侍たちは、口々にののしりながら、早くも太刀たちを打ちかけようとする。もうこうなつては、逃げようとしても逃げられない。猪熊の爺の顔は、とうとう死人しびとのような色になつた。

「何がうそじゃ。何がうそじゃよ。」

彼は、目を大きくして、あたりをしきりに見回しながら、逃げ場はないかと気をあせつた。額には、つめたい汗がわいて来る。手もふるえが止まらない。が、周囲は、どこを見ても、むごたら

しい生死の争いが、盗人と侍との間に戦われているばかり、静かな月の下ではあるが、はげしい太刀音たちおとと叫喚ひとかたまりの声とが、一塊ひとかたまりになつた敵味方の中から、ひっきりなしにあがつて来る。——しよせん逃げられないときとつた彼は、目を相手の上にすえると、たちまち別人のように、凶悪ほこなけしきになつて、上下じょうげの齒をむき出しながら、すばやく鉾ほこをかまえて、威丈高いたけだかにののしつた。

「うそをついたがどうしたのじゃ。阿呆あほう。外道げどう。畜生。さあ来い。」

こう言うことばと共に、鉾ほこの先からは、火花が飛んだ。中でも屈くつきょう 竟きやうな、赤あぎのある侍が一人、衆に先んじてかたわらから、無二無三に切つてかかったのである。が、もとより年をとつた彼

が、この侍の相手になるわけはない。まだ十合じゅうごうと刃はを合わせないうちに、見る見る、鉾ほこ先さきがしどろになって、次第にあとへ下がってゆく。それがやがて小路のまん中まで、切り立てられて来たかと思うと、相手は、大きな声を出して、彼が持っていた鉾ほこの柄えを、みごとに半ばから、切り折った。と、また一太刀ひとたち、今度は、右の肩先から胸へかけて、袈裟けさがけに浴びせかける。猪熊いのくまの爺おじは、尻居しりいに倒れて、とび出しそうに大きく目を見ひらいたが、急に恐怖と苦痛とに堪えられなくなったのであろう、あわてて高た這かばいに這はいのきながら声をふるわせて、わめき立てた。

「だまし討ちじゃ。だまし討ちを、食らわせおった。助けてくれ。だまし討ちじゃ。」

赤あぎの侍は、その後ろからまた、のび上がって、血に染んだ太刀たちをふりかざした。その時もし、どこからか猿さるのようなものが、走つて来て、帷子かたびらの裾すそを月にひるがえしながら、彼らの中へとびこまなかつたとしたならば、猪熊いのくまの爺おじは、すでに、あえない最後を遂げていたのに相違ない。が、その猿さるのようなものは、彼と相手との間を押しへだてると、とつさに小刀さすがをひらめかして、相手の乳の下へ刺し通した。そうして、それとともに、相手の横に払った太刀たちをあびて、恐ろしい叫び声を出しながら、焼け火箸ひぼしでも踏んだように、勢いよくとび上がると、そのまま、向こうの顔へしがみついて、二人いっしょにどうと倒れた。

それから、二人の間には、ほとんど人間とは思われない、猛烈

なつかみ合いが、始まった。打つ。噛む。髪をむしる。しばらくは、どちらがどちらともわからなかつたが、やがて、猿のようなものが、上になると、再び小刀さすががきらりと光つて、組みしかれた男の顔は、痣あざだけ元のように赤く残しながら、見ているうちに、色が変わつた。すると、相手もそのまま、力が抜けたのか、侍の上へ折り重なつて、仰向けにぐたりとなる——その時、始めて月の光にぬれながら、息も絶え絶えにあえいでいる、しわだらけの墓ひきに似た、猪熊のぼばの顔が見えた。

老婆は、肩で息をしながら、侍の死体の上に横たわつて、まだ相手の髻もとどりをとらえた、左の手もゆるめずに、しばらくは苦しそうな呻しんげん吟の声をつづけていたが、やがて白い目を、ぎよろりと一

つ動かすと、干ひからびたくちびるを、二三度無理に動かして、

「おじいさん。おじいさん。」と、かすかに、しかもなつかしそ

うに、自分の夫を呼びかけた。が、たれもこれに答えるものはな

い。猪熊いのくまの爺おじは、老女の救いを得うると共に、打ち物も何も投げ

すてて、こけつまろびつ、血にすべりながら、いち早くどこかへ

逃げてしまった。そのあとにももちろん、何人かの盗人たちは、

小路こうじのそこここに、得物えものをふるって、必死の戦いをつづけている。

が、それらは皆、この垂死の老婆にとって、相手の侍と同じよう

な、行路の人に過ぎないのであろう。——猪熊のばばは、次第に

細こってゆく声で、何度となく、夫の名を呼んだ。そうして、その

たびに、答えられないさびしさを、負おうている傷の痛みよりも、

より鋭く味わわされた。しかも、刻々衰えて行く視力には、次第に周囲の光景が、ぼんやりとかすんで来る。ただ、自分の上にひろがっている大きな夜の空と、その中にかかっている小さな白い月と、それよりほかのものは、何一つはつきりとわからない。

「おじいさん。」

老婆は、血の交じった唾つばを、口の中にためながら、ささやくようにこう言うのと、それなり恍惚こうこつとした、失神の底に、——おそらくは、さめる時のない眠りの底に、昏々こんこんとして沈んで行つた。その時である。太郎は、そこを栗毛くりげの裸馬にまたがって、血にまみれた太刀たちを、口にくわえながら、両の手に手綱たづなをとって、あらしのように通りすぎた。馬は言うまでもなく、沙金しゃきんが目をつ

けた、陸奥出の三才駒であろう。すでに、盗人たちがちりぢりに、死人を残して引き揚げた小路は、月に照らされて、さながら霜を置いたようにうす白い。彼は、乱れた髪を微風に吹かせながら、馬上に頭をめぐらして、後にのしり騒ぐ人々の群れを、誇らかにながめやった。

それも無理はない。彼は、味方の破れるのを見ると、よしや何物を得なくとも、この馬だけは奪おうと、かたく心に決したのである。そうして、その決心どおり、葛巻きの太刀をふるいふるい、手に立つ侍を切り払って、单身門の中に踏みこむと、苦もななく厩の戸を蹴破って、この馬の羈綱を切るより早く、背に飛びのる間も惜しいように、さえぎるものをひづめにかけて、いっさん

に宙を飛ばした。そのために受けた傷も、もとより数えるいとまはない。水干すいかんの袖そではちぎれ、烏帽子えぼしはむなしく紐ひもをとどめて、ずたずたに裂かれた袴はかまも、なまぐさい血潮に染まっている。が、それも、太刀と鉾ほことの林の中から、一人に会えば一人を切り、二人に会えば二人を切つて、出て来た時の事を思えば、うれしくこそあれ、惜しくはない。——彼は、後ろを見返り見返り、晴れ晴れした微笑を、口角に漂わせながら、昂然こうぜんとして、馬を駆つた。彼の念頭には、沙金がある。と同時にまた、次郎もある。彼は、みずから欺く弱さをしかりながら、しかもなお沙金しゃきんの心が再び彼に傾く日を、夢のように胸に描いた。自分でなかつたなら、たれがこの馬をこの場合、奪う事ができるだろう。向こうには、人

の和があつた。しかも地の利さえ占めてゐる。もし次郎だつたとしたならば——彼の想像には、一瞬間の間あいだ、侍たちの太刀たちの下に、切り伏せられている弟の姿が、浮かんだ。これは、もちろん、彼にとつて、少しも不快な想像ではない。いやむしろ彼の中にあるある物は、その事実である事を、祈りさえした。自分の手を下さずに、次郎を殺す事ができるなら、それはひとり彼の良心を苦しめずにすむばかりではない。結果から言えば、沙金がそのために、自分を憎む恐れもなくなつてしまふ。そう思いながらも、彼は、さすがに自分の卑怯ひきようを恥じた。そうして口にくわえた太刀を、右手めでにとつて、おもむろに血をぬぐつた。

そのぬぐつた太刀を、ちようど鞆さやにおさめた時である。おりか

ら辻^{つじ}を曲がった彼は、行く手の月の中に、二十と言わず三十と言わず、群がる犬の数を尽くして、びようびようとほえ立てる声を聞いた。しかも、その中にただ一人、太刀をかざした人の姿が、くずれかかった築土^{つじ}を背負つて、おぼろげながら黒く見える。と
 思う間に、馬は、高いいななきながら、長い鬣^{たてがみ}をさつと振るうと、
 四つの蹄^{ひづめ}に砂煙をまき上げて、またたく暇に太郎をそこへ疾風の
 ように持つて行つた。

「次郎か。」

太郎は、我を忘れて、叫びながら、険しく眉^{まゆ}をひそめて、弟を見た。次郎も片手に太刀^{たち}をかざしながら、項^{うなじ}をそらせて、兄を見た。そうして刹那^{せつな}に二人とも、相手の瞳^{ひとみ}の奥にひそんでいる、恐

ろしいものを感じ合った。が、それは、文字どおり刹那である。

馬は、吠^ほえたける犬の群れに、脅かされたせいであろう、首を空ざまにつとあげると、前足で大きな輪をかきながら、前よりもすみやかに、空へ跳^{おど}つた。あとには、ただ、濛^{もうもう}々としたほこりが、夜空に白く、ひとしきり柱になって、舞い上がる。次郎は、依然として、野犬の群れの中に、傷をこうむつたまま、立ちすくんだ。

……

太郎は——一時に、色を失つた太郎の顔には、もうさつきの微笑の影はない。彼の心の中では、何ものかが、「走れ、走れ」とささやいている。ただ、一^{いつとき}時、ただ、半^{はんとき}時、走りさえすれば、それで万事が休してしまふ。彼のする事を、いつかしくてはな

らない事を、犬が代わってしてくれるのである。

「走れ、なぜ走らない？」 ささやきは、耳を離れない。そうだ。

どうせいつかしなくてはならない事である。おそいと早いとの相違がなんであろう。もし弟と自分の位置を換えたにしても、やはり弟は自分のしようとする事をするに違いない。「走れ。羅生らしよう

門もんは遠くはない。」 太郎は、片目に熱を病んだような光を帯び

て、半ば無意識に、馬の腹を蹴けった。馬は、尾と鬣たてがみとを、長く風

になびかせながら、ひづめに火花を散らして、まっしぐらに狂奔する。一町二町月明かりの小路は、太郎の足の下で、急湍きゆうたんのように後ろへ流れた。

するとたちまちまた、彼のくちびるをついて、なつかしいこと

ばが、あふれて来た。「弟」である。肉身の、忘れる事のできな
い「弟」である。太郎は、かたく手綱たづなを握つたまま、血相を変え
て齒がみをした。このことばの前には、いつさいの分別が眼底を
払つて、消えてしまう。弟か沙しやきん金かの、選択をしいられたわけ
ではない。直下じきげにこのことばが電光のごとく彼の心を打つたので
ある。彼は空も見なかつた。道も見なかつた。月はなおさら目に
はいらなかつた。ただ見たのは、限りない夜である。夜に似た愛
憎の深みである。太郎は、狂気のごとく、弟の名を口外に投げる
と、身をのけざまに翻して、片手の手綱たづなを、ぐいと引いた。見る
見る、馬の頭かしらが、向きを変える。と、また雪のような泡あわが、栗毛くりげ
の口にあふれて、蹄ひづめは、砕けよとばかり、大地を打った。——

瞬ののち、太郎は、惨として暗くなった顔に、片目を火のごとくかがやかせながら、再び、もと来たほうへまっしぐらに汗馬かんばを跳おどらせていたのである。

「次郎。」

近づくままに、彼はこう叫んだ。心の中に吹きすさぶ感情のあらしが、このことばを機会として、一時に外へあふれたのである。その声は、白燃鉄はくねんてつを打つような響きを帯びて、鋭く次郎の耳を貫ぬいた。

次郎は、きつと馬上の兄を見た。それは日ごろ見る兄ではない。いや、今しがた馬を飛ばせて、いつさんに走り去った兄とさえ、変わっている。険しくせまった眉まゆに、かたく、下くちびるをかん

だ菌に、そうしてまた、怪しく熱している片目に、次郎は、ほとんど憎悪に近い愛が、——今まで知らなかった、不思議な愛が燃え立っているのを見たのである。

「早く乗れ。次郎。」

太郎は、群がる犬の中に、隕石いんせきのような勢いで、馬を乗り入れると、小路を斜めに輪乗りをしながら、叱咤しったするような声で、こう言った。もとより躡ちゆうちよ躡ちゆうちよに、時を移すべき場合ではない。

次郎は、やにわに持っていた太刀たちを、できるだけ遠くへほうり投げると、そのあとを追つて、頭をめぐらす野犬のすきをうかがつて、身軽く馬の平首へおどりついた。太郎もまたその刹那せつなに猿臂えんびをのばし、弟の襟えりがみ上がみをつかみながら、必死になつて引きずり上

げる。——馬の頭かしらが、鬣たてがみに月の光を払って、三たび向きを変えた時、次郎はすでに馬背にあつて、ひしと兄の胸をいだいていた。

と、たちまち一頭、血みどろの口をした黒犬が、すさまじくうなりながら、砂を巻いて鞍くらっほ壺へ飛びあがった。とがった牙きばが、危うく次郎のひざへかかる。そのとたんに、太郎は、足をあげて、したたか栗毛くりげの腹を蹴けった。馬は、一声いななきながら、早くも尾を宙に振るう。——その尾の先をかすめながら、犬は、むなく次郎の脛布はげきを食いちぎって、うずまく獣の波の中へ、まつさかさまに落ちて行つた。

が、次郎は、それをうつくしい夢のように、うつとりした目にながめていた。彼の目には、天も見えなければ、地も見えない。

ただ、彼をいだいている兄の顔が、——半面に月の光をあびて、じつと行く手を見つめている兄の顔が、やさしく、おごそかに映っている。彼は、限りない安息が、おもむろに心を満たして来るのを感じた。母のひざを離れてから、何年にも感じた事のない、静かな、しかも力強い安息である。——

「にいさん。」

馬上にある事も忘れたように、次郎はその時、しかと兄をいだくと、うれしそうに微笑しながら、頬ほおを紺の水すいかん干の胸にあてて、はらはらと涙を落としたのである。

半時はんとときののち、人通りのない朱雀すざくの大路おおじを、二人は静かに馬を進めて行った。兄も黙っていれば、弟も口をきかない。しんとし

た夜は、ただ馬蹄ばていの響びやうきにこだまをかえして、二人の上の空には涼しい天の川がかかっている。

八

羅生門らしようもんの夜よは、まだ明けない。下から見ると、つめたく露を置いた葺いらかや、丹塗にぬりのはげた欄干らんかんに、傾きかかった月の光が、いざよいながら、残のこっている。が、その門の下は、斜めにつき出した高い檐のきに、月も風もさえぎられて、むし暑い暗くらがり、絶えまなく藪蚊やぶかに刺さされながら、酸すえたようによどんでいる。藤判官とうはんの屋敷から、引き揚げてきた偷ちゆう盗とうの一群は、そのやみの中に

かすかな松明^{たいまつ}の火をめぐりながら、三々五々、あるいは立ちあ
 るいは伏し、あるいは丸柱の根がたにうづくまつて、さつきから、
 それぞれけがの手当^{いそがわ}てに忙しい。

中でも、いちばん重手^{おもて}を負つたのは、猪熊^{いのくま}の爺^{おじ}である。彼は、
 沙金^{しやきん}の古い桂^{うちぎ}を敷いた上に、あおむけに横たわつて、半ば目を
 つぶりながら、時々ものにおびえるように、しわがれた声で、う
 めいている。一時の間^{ひとときあいだ}、ここにこうしているのか、それとも一年
 も前から同じように寝ているのか、彼の困憊^{こんぱい}した心には、それ
 さえ時々はわからない。目の前には、さまざまな幻^{まぼろし}が、瀕死^{ひんし}の彼
 をあざけるように、ひっきりなく徂来^{そらい}すると、その幻と、現在門
 の下で起こっている出来事とが、彼にとっては、いつか全く同一

な世界になつてしまふ。彼は、時と所とを分かたない、昏迷こんめいの底に、その醜い一生を、正確に、しかも理性を超越したある順序で、まざまざと再び、生活した。

「やい、お婆ば、お婆ばはどうした。お婆ば。」

彼は、暗やみから生まれて、暗やみへ消えてゆく恐ろしい幻に脅かされて、身をもだえながら、こううなつた。すると、かたわらから額の傷を汗衫かざみの袖そでで包んだ、交野かたのの平六が顔を出して、

「お婆ばか。お婆ばはもう十萬億土へ行つてしまつた。おおかた蓮はちすの上でな、おぬしの来るのを、待ち焦がれている事じやろう。」

言ひすてて、自分の冗談を、自分でからからと笑いながら、向かうのすみに、真木島まきのしまの十郎の腿もものけがの手当をしている、沙し

やきん
金のほうをふり返つて、声をかけた。

「お頭かしら、おじじはちとむずかしいようじや。苦しめるだけ、殺せつし生ようじやて。わしがとどめを刺してやろうかと思うがな。」

沙金は、あでやかな声で、笑つた。

「冗談じやないよ。どうせ死ぬものなら、自然に死なしておやりな。」

「なるほどな、それもそうじや。」

いのくま
おじ
猪熊の爺は、この問答を聞くと、ある予期と恐怖とに襲われ

て、からだじゆうが一時に凍るような心もちがした。そうして、

また大きな声でうなつた。平六と同じような理由で、敵には臆おくび病ような彼も、今までに何度、致死期ちしごの仲間の者をその鋒ほこの先で、

とどめを刺したかわからない。それも多くは、人を殺すという、ただそれだけの興味から、あるいは自分の勇気を人にも自分にも示そうとする、ただそれだけの目的から、進んでこの無残なしわざをあえてした。それが今は――

と、たれか、彼の苦しみも知らないように、灯ひの陰で一人、鼻歌をうたう者がある。

いたち笛ふき

猿さるかなず

いなごまろは拍子うつ

きりぎりす

ぴしやりと、蚊をたたく音が、それに次いで聞こえる。中には

「ほう、やれ」と拍子をとったものもあつた。二三人が、肩をゆすつたけはいで、息のつまつたような笑い声を立てる。——猪いのく熊まの爺おじは、総身そうみをわなわなふるわせながら、まだ生きているという事実を確かめたいために、重い眸まぶたを開いて、じつともし火の光を見た。灯ともしは、その炎のまわりに無数の輪をかけながら、執し拗ゆうねい夜に攻められて、心細い光を放っている。と、小さな黄こがね金虫むしが一匹ふうんと音を立てて、飛んで来て、その光の輪にはいったかと思うとたちまち羽根を焼かれて、下へ落ちた。青臭いにおいが、ひとしきり鼻を打つ。

あの虫のように、自分もほどなく死ななければならぬ。死ねば、どうせ蛆うじと蠅はえとに、血も肉も食いつくされるからだである。

ああこの自分が死ぬ。それを、仲間のは、歌をうたったり笑ったりしながら、何事も無いように騒いでいる。そう思うと、猪いのくまの爺おじは、名状しがたい怒りと苦痛とに、骨髓をかまれるような心もちがした。そうして、それとともに、なんだか轆轤ろくろのようにとめどなく回っている物が、火花を飛ばしながら目の前へおりにて来るような心もちがした。

「畜生。人でなし。太郎。やい。極道ごくどう。」

まわらない舌の先から、おのずからこういふことばが、ときれとぎれに落ちて来る。——真木島まきのしまの十郎は、腿ももの傷が痛まないように、そつとねがえりをうちながら、喉のどのかわいたような声で、沙金しゃきんにささやいた。

「太郎さんは、よくよく憎まれたものさな。」

沙金しゃきんは、眉まゆをひそめながら、ちよいと猪熊いのくまの爺おじのほうを見

て、うなずいた。すると鼻歌をうたつたのと同じ声で、

「太郎さんはどうした。」とたずねたものがある。

「まず助かるまいな。」

「死んだのを見たと言ったのは、たれじゃ。」

「わしは、五六人を相手に切り合っているのを見た。」

「やれやれ、頓生とんしょう菩提ぼだい、頓生菩提。」

「次郎さんも、見えないぞ。」

「これも事によると、同じくじゃ。」

太郎も死んだ。おばばも、もう生きてはいない。自分も、すぐ

に死ぬであろう。死ぬ。死ぬとは、なんだ。なんにしても、自分は死にたくない。が、死ぬ。虫のように、なんの造作ぞうさくもなく死んでしまう。——こんな取りとめのない考えが、暗やみの中に鳴いている藪蚊やぶがのように、四方八方から、意地悪く心を刺して来る。猪熊の爺は、形のない、気味の悪い「死」が、しんぼうづよく、丹塗にぬりの柱の向こうに、じつと自分の息をうかがっているのを感じた。残酷に、しかもまた落ち着いて、自分の苦痛をながめているのを感じた。そうして、それが少しずつ居ざりながら、消えてゆく月の光のように、次第にまくらもとへすりよって来るのを感じた。なんにしても、自分は死にたくない。——

夜はたれとか寝いねむ

常陸ひたちの介すけと寝いねむ

寝いねたる肌はだもよし

男山の峰のもみじ葉

さぞ名はたつや

また、鼻歌の聲が、油しめ木ぎの音のような呻しんぎん吟の聲と一つになつた。とたれか、猪熊いのくまの爺おじの枕まくらもとで、つばをはきながら、こう言つたものがある。

「阿濃あしぎのあほうが見えぬの。」

「なるほど、そうじゃ。」

「おおかた、この上に寝ておろう。」

「や、上で猫ねこが鳴くぞ。」

みな、一時にひっそりとなった。その中を、絶え絶えにつづく猪熊いのくまの爺おじのうなり声と一つになって、かすかに猫の声が聞こえて来る。と流れ風が、始めてなま暖かく、柱の間を吹いて、うす甘いのうぜんかずら凌霄花のにおいが、どこからかそつと一同の鼻を襲った。

「猫も化けるそうな。」

「阿濃あしぎの相手には、猫の化けた、老いぼれが相当じゃよ。」

すると、沙金しゃきんが、衣きぬずれの音をさせて、たしなめるように、こう言った。

「猫じゃないよ。ちよつとたれか行つて、見て来ておくれ。」

声に応じて、交野かたのの平六が、太刀たちの鞘さやを、柱にぶっつけながら、立ち上がった。楼はしご上に通う梯子は、二十いくつの段をきぎんで、

その柱の向こうにかかっている。——一同は、理由のない不安に襲われて、しばらくはたれも口をとぎしてしまった。その間をただ、凌霄花のにおいのする風が、またしてもかすかに、通りぬけると、たちまち楼上で平六の、何か、わめく声があった。そうして、ほどなく急いで梯子をおりて来る足音が、あわただしく、重苦しい暗やみをかき乱した。——ただ事ではない。

「どうじゃ。阿濃あこぎめが、子を産みおったわ。」

平六は、梯子はしごをおりると、古被衣ふるかすきにくるんだ、丸々としたものを、勢いよくともし火の下へ出して見せた。女の臭においのする、うすよごれた布の中には、生まれたばかりの赤ん坊が、人間というよりは、むしろ皮をむいた蛙かえるのように、大きな頭を重そうに動

かしながら、醜い顔をしかめて、泣き立てている。うすい産毛うぶげと
いい、細い手の指と言ひ、何一つ、嫌悪けんおと好奇心とを、同時にそ
そらないものはない。——平六は、左右を見まわしながら、抱い
ている赤子を、ふり動かして、得意らしく、しゃべり立てた。

「上へ上がって見ると、阿濃め、窓の下へつつ伏したなり、死ん
だようになつて、うなつていると、阿呆あほうとはいえ、女の部じや。
癩しかくかと思つて、そばへ行くと、いや驚くまい事か。さかなの腸はらわたを
ぶちまけたようなものが、うす暗い中で、泣いているわ。手をや
ると、それがぴくりと動いた。毛のないところを見れば、猫ねこでも
あるまい。じやてひつつかんで、月明かりにかざして見ると、こ
のとおり生まれたばかりの赤子じや。見い。蚊に食われたと見え

て、胸も腹も赤まだらになっているわ。阿濃も、これからはおふくろじやよ。」

松明^{たいまつ}の火を前に立った、平六のまわりを囲んで、十五六人の盗人は、立つものは立ち、伏すものは伏して、いずれも皆、首をのぼしながら、別人のように、やさしい微笑を含んで、この命が宿ったばかりの、赤い、醜い肉塊を見守った。赤ん坊は、しばらくも、じつとしていない。手を動かす。足を動かす。しまいには、頭を後ろへそらせて、ひとしきりまた、けたたましく泣き立てたと、齒のない口の中が見える。

「やあ舌がある。」

前に鼻歌をうたった男が、頓^{とんきよう}狂な声で、こう言った。それ

につれて、一同が、傷も忘れたように、どつと笑う。——その笑い声のあとを追いかけるように、この時、突然、猪熊いのくまの爺おじが、どこにそれだけの力が残っていたかと思うような声で、険しく一同の後ろから、声をかけた。

「その子を見せてくれ。よ。その子を見せないか。やい、極ごくど道う。」

平六は、足で彼の頭をこづいた。そうして、おどかすような調子で、こう言った。

「見たければ、見るさ。極道とは、おぬしの事じゃ。」

猪熊の爺は、濁った目を大きく見開いて、平六が身をかがめながら、無造作につきつけた赤ん坊を、食いつきそうな様子をして、

じつと見た。見ているうちに、顔の色が、次第に蠟ろうのごとく青ざめて、しわだらけの眦まなじりに、涙が玉になりながら、たまって来ると思ふと、ふるえるくちびるのほりには、不思議な微笑の波が漂つて、今までにない無邪気な表情が、いつか顔じゅうの筋肉を柔らげた。しかも、饒じょうぜつ舌な彼が、そうなつたまま、口をきかない。一同は、「死」がついに、この老人を捕えたのを知つた。しかし彼の微笑の意味はたれも知つてゐるものがない。

猪熊いのくまの爺おじは、寝たまま、おもむろに手をのべて、そつと赤ん坊の指に触れた。と、赤ん坊は、針にでも刺されたように、たちまちいたいたしい泣き声を上げる。平六は、彼をしかろうとして、そうしてまた、やめた。老人の顔が——血のけを失つた、この酒さ

かぶと

肥りの老人の顔が、その時ばかりは、平生とちがった、犯しがたいいかめしさに、かがやいているような気がしたからである。その前には、沙しやきん金でさえ、あたかも何物かを待ち受けるように、息を凝らしながら、養父の顔を、——そうしてまた情人おとこの顔を、目もはなさず見つめている。が、彼はまだ、口を開かない。ただ、彼の顔には、秘密な喜びが、おりから吹きだした明け近い風のように、静かに、ここちよく、あふれて来る。彼は、この時、暗い夜の向こうに、——人間の目のとどかない、遠くの空に、さびしく、冷ややかに明けてゆく、不滅な、黎明れいめいを見たのである。

「この子は——この子は、わしの子じや。」

彼は、はっきりこう言って、それから、もう一度赤ん坊の指に

ふれると、その手が力なく、落ちそうになる。——それを、沙しやき金が、かたわらからそつとささえた。十余人の盗人たちは、このことばを聞かないように、いずれも唾つをのんで、身動きもしない。と、沙金が顔を上げて、赤子を抱いたまま、立っている交野かたのの平六の顔を見て、うなずいた。

「啖たんがつまる音じや。」

平六は、たれに言うともなく、つぶやいた。——猪熊いのくまの爺おじは、暗やみにおびえて泣く赤子の声の中に、かすかな苦悶くもんをつづけながら、消えかかる松明たいまつの火のように、静かに息をひきとつたのである。

……

「爺おじも、とうとう死んだの。」

「さればさ。阿濃あこぎを手ごめにした主ぬしも、これで知れたと言うものじゃ。」

「死骸しがいは、あの藪やぶなか中へ埋めずばなるまい。」
 からす えじき
 「鴉の餌食にするのも、気の毒じゃな。」

盗人たちは、口々にこんな事を、うす寒そうに、話し合つた。と、遠くで、かすかに、鶏の声がする。いつか夜の明けるのも、近づいたらしい。

「阿濃は？」と沙金が言つた。

「わしが、あり合わせの衣きぬをかけて、寝かせて来た。あのからだじゃやて、大事はあるまい。」

平六の答えも、日ごろに似ずものやさしい。

そのうちに、盗人が二人三人、猪熊いのくまの爺おじの死骸しがいを、門の外へ運び出した。外も、まだ暗い。有明ありあけの月のうすい光に、蕭しょうじ条ようとした藪やぶが、かすかにこずえをそよめかせて、凌霄花のうぜんかずらのにおいが、いよいよ濃く、甘く漂っている。時々かすかな音のするは、竹の葉をすべる露であらう。

「生死事大しょうじじだい。」

「無常迅速。」

「生き顔より、死に顔のほうがよいようじやな。」

「どうやら、前よりも真人間らしい顔になった。」

猪熊の爺の死骸は、斑々はんぱんたる血痕けっこんに染まりながら、こういうことばのうちに、竹と凌霄花との茂みを、次第に奥深く昇かかれ

て行つた。

九

翌日、猪熊のある家で、むごたらしく殺された女の死骸が発見された。年の若い、肥ふとつた、うつくしい女で、傷の様子では、よほどはげしく抵抗したもらしい。証拠ともなるべきものは、その死骸しがいが口にくわえていた、朽ち葉色の水干の袖そでばかりである。

また、不思議な事には、その家の婢女みずしをしていた阿濃あこぎという女は、同じ所にながら、薄手一つ負わなかつた。この女が、検非けび違使いしちよう庁で、調べられたところによると、だいたいこんな事があ

ったらしい。だいたいと言うのは、阿濃が天性白痴に近いところから、それ以上要領を得る事が、むずかしかつたからである。――

その夜、阿濃は、夜ふけて、ふと目をさますと、太郎次郎という兄弟のものと、沙金しやきんとが、何か声高こわだかに争っている。どうしたのかと思つているうちに、次郎が、いきなり太刀たちをぬいて、沙金を切つた。沙金は助けを呼びながら、逃げようとする、今度は太郎が、刃やいばを加えたらしい。それからしばらくは、ただ、二人ののしる声と、沙金の苦しむ声とがつづいたが、やがて女の息がとまると、兄弟は、急にいだきあつて、長い間黙つて、泣いていた。阿濃は、これを遣り戸やどのすきまから、のぞいていたが、主

人を救わなかったのは、全く抱いて寝ている子供に、けがをさすまいと思つたからである。――

「その上、その次郎さんと申しますのが、この子の親なのでございます。」

あこぎ 阿濃は、急に顔を赤らめて、こう言つた。

「それから、太郎さんと次郎さんとは、わたしの所へ来て、たつしやでいろよと申しました。この子を見せましたら、次郎さんは、笑いながら、頭をなでてくれましたが、それでもまだ目には涙がいつぱいたまっております。わたしはもつとそうしていかつたのでござりますが、二人とも、たいへんに急いで、すぐに外へ出ますと、おおかた枇杷びわの木にでもつないでおいたのでござ

いましよう、馬へとびのつて、どこかへ行つてしまいました。馬は二匹ではございません。わたしが、この子を抱いて、窓から見ておりますと、一匹に二人で乗つて行くのが、月がございましたから、よく見えました。そのあとで、わたしは、主人の死骸しがいはそのままにして、そつとまた床へはいました。主人がよく人を殺すのを見ましたから、その死骸もわたしには、こわくもなんともなかったのでございます。」

検非違使けびいしには、やつとこれだけの事がわかった。そうして、阿濃は、罪の無いのが明らかになつたので、さつそく自由の身にされた。

それから、十年余りのち、尼になつて、子供を養育していた阿

濃は、たんごのかみなにがし丹後守何某の隨身に、きようゆう驍勇の名の高い男の通るのを見て、あれが太郎だと人に教えた事がある。なるほどその男も、うす痘瘡いもで、しかも片目つぶれていた。

「次郎さんなら、わたしすぐにも駆けて行って、会うのだけれど、あの人はこわいから……」

あこぎ阿濃は、娘のようなしなをして、こう言った。が、それがほんとうに太郎かどうか、それはたれにも、わからない。ただ、その男にも弟があつて、やはり同じ主人に仕えるという事だけ、そののちかすかに風聞された。

(大正六年四月二十日)

青空文庫情報

底本：「羅生門・鼻・芋粥・偷盜」岩波文庫、岩波書店

1960（昭和35）年11月25日第1刷発行

1993（平成5）年9月20日第46刷発行

底本の親本：「芥川竜之介全集」岩波書店

1954（昭和29）年～1955（昭和30）年

初出：「中央公論」

1917（大正6）年4、7月

入力：福田芽久美

校正：野口英司

1998年10月4日公開

2007年9月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

偷盗

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>